

# JASIS

## NEWS

# No. 55

2015/1/25

## 日本インテリア学会会報

### ■会長挨拶

#### 大会を振り返って

学会長 直井英雄（東京理科大学）

本年の大会も、おかげさまで無事終えることができました。厳しい状況のなか、実行委員会として大会を仕切ってくださった北海学園大学の杉本博之先生と石橋達勇先生、支部長の小澤武さん、それに骨身惜しまず手伝ってくださった学生さんたちに、学会を代表して深く感謝いたします。また、日曜日にもかかわらず、わざわざ時間を割いてご挨拶にお見えくださった北海学園大学学長の木村和範先生にも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。もちろん、この実行委員会を陰になり日向になって支えてくださった本部事務局、関係者の方々にも、会長として、お礼を申し上げなければなりません。ありがとうございました。

さて、これまでの大会もそうでしたが、この大会も、一参加者としての私にとっては、インテリアについての新しい知見に触れる貴重な機会を提供してくれる場として、実にわくわくする大会となりました。

まず、見学会。「北海道開拓の村」では、展示してある建物自体に対しては、それぞれ個別の興味深さを大いに楽しみながら見て回りましたが、全体を見終わって、必ずしもすぐには結論の出ないような思いにもふけりました。北海道という厳しい風土と生活の場としてのこれらの建物の関係は、果たしてうまくマッチングしていたといえるのだろうかとか、建築とインテリアの間には、漠然とはしていても境目といえるものがあるのだろうか、それとも一体につながっていて特にそのようなものはないのだろうかとか。

次の「札幌聖ミカエル教会」では、心が洗われるような簡素で静謐な空間を堪能しました。これは私の勝手な想像ですが、この作品の構想は、まず、インテリア空間の発想から始まったのではないかと思えてなりません。その発想が不思議な木造トラスのアイデアにつながり、全体の形へと結実していったのではないかと。まあ想像は自由ですからね。

翌日の講演会も、私にとっては、興味の尽きない内容のものとなりました。「北国のくらしの変遷と家具の普及」と題したカンディハウスの長原實氏の話は、わが国における家具とインテリアの現代史といった趣で、たまたまこの業界のすぐ隣あたりで仕事をしてきた私にとっては、いわば同時代史ですから、それこそ身につまされるような思いで聞き入ってしまいました。深い内容の説得力のある話に感謝です。

それ以外の行事、というよりむしろ大会行事の中心である研究発表会や卒業作品展、各種の表彰、それに懇親会などについても、とどこおりなく、かつ成功裏に終えることができたのではないかと考えております。これらの行事それぞれについて、重要な役目を果たしてくださった方々にも、最後となりましたが、深甚の謝意を表し、会長挨拶といたします。

### ■第26回日本インテリア学会大会報告

大会実行委員長 石橋達勇（北海学園大学）

日時：平成26年10月25日（土）、26日（日）

会場：北海学園大学 豊平キャンパス

前回の第25回大会終了時に「次回を北海道で開催できないか」とのご相談を頂き、これまで学会でお世話になったことのお返しの意味を込めて、有り難く本学での開催をお受け致しました。しかしながら実行委員会の組織が脆弱であったこともあり、準備においては多くの先生方や学会事務局関係各位にご指導ご協力を頂きながら進めることとなりました。言い訳となりますが、この様な状況のもと運営に関して行き届かないところがあり、大会にご参加頂いた各位には期間中、ご不便ご不快に思われたことが多々あったかと深く反省しております。紙上をお借りして改めてお詫び申し上げます。

さて、今回の大会の開催結果についてご報告致します。本大会は杉本博之先生（北海学園大学工学部・学部長、教授）を大会長として、本学豊平キャンパスおよび札幌市内各所において例年どおりの催事を開催することが出来ました。大会が開催される10月下旬は、札幌ではそろそろ冬を迎える時期で天候や気温の低下を心配致しましたが、結果として特に問題はなかったかと考えております。

大会1日目は見学会と懇親会が行われました。見学会は北海道開拓の村および札幌聖ミカエル教会を見学先に選定し、案内は小澤武氏（北海道支部長、小澤建築研究室）にお願いしました。

JR新札幌駅に参加者24名が集合した後、貸し切りバスにてまず開拓の村へ移動しました。北海道開拓の村は、北海道100年を記念して、明治から昭和初期の道内の建築52棟を移築復元・再現した野外博物館です。管理者ご担当の方からの解説も頂き、北方圏の文化や風土を存分に感じる事ができ、大変興味深い内容であったと訊いております。次に札幌聖ミカエル教会へ移動しました。札幌聖ミカエル教会はアントニオ・レーモンドの設計、竹中工務店の施工により1960年に建設されたものです。とど松の丸太で組み上げられ、自然の風合いが生かされたレーモンドの設計による東北以北で現存する唯一の作品として広く知られています。ここでも信者の方からの解説を頂き、レーモンドの作風や世界観を十分に堪能して頂いたようです。

懇親会は大通公園に近いホテルオークラ札幌にて行いました。39名の参加の下、大会長と実行委員長の歓迎挨拶の後、直井英雄学会長のご発声による乾杯で宴が始まりました。道産食材による料理をご堪能頂きながら、参加者間で和やかな懇談に花が咲いたのではないのでしょうか。その後、各委員会委員長や支部長からの活動報告もあり、北海道支部長の挨拶を最期に散会となりました。

大会2日目は研究発表会、卒業作品展、講演会が行われました。

研究発表会は4会場に分かれ、例年どおり歴史、計画、人間工学などインテリア学に関わる多様な発表と活

発な議論が行われました。なお発表題数は口頭発表とパネル発表を合わせて47題でした。

教育部会の主催で行われた卒業作品展は、全国48の大学・専門学校・高等学校から57点の出品がありました。想定を超えて昨年より大幅に出品数が増加したこともあり、作品をゆっくりと見るには少々会場が手狭で申し訳ありませんでしたが、その分作品制作に込めた学生達の熱い思いを身近に感じる事が出来たのではないのでしょうか。なおその後開催された、学会長を含めた審査委員会の厳正な審査により、今年の卒業作品展最優秀賞1点、優秀作品賞3点、奨励賞2点が選考されました。詳細は別途教育部会からの報告をご参照下さい。

昼食を挟んで午後は講演会が行われました。長原實氏（株式会社CANDE HOUSE・相談役）を講師にお招えし、「北国のくらしの変遷と家具の普及」というテーマでご講演を頂きました。時代背景を巧みに織り交ぜながら、ご自身の会社のみならず家具の街・旭川を全国に知らしめたこれまでの活動の変遷を中心にお話頂きました。氏の家具にかけてきたクラフトマンとしてのエネルギーに、ただ圧倒された90分でした。

後半の研究発表会が行われた後、閉会式では、長年の学会に対する数々の功績を称え、北浦かほる氏（大阪市立大学・名誉教授）と日原もとこ氏（東北芸術工科大学・名誉教授）の両氏に名誉会員の称号が授与されました。また引き続いて大会発表賞受賞者として波多野雅之氏（広島工業大学）と古庄純菜氏（文化学園大学大学院）がそれぞれ発表・表彰され、閉会宣言をもって全日程が終了しました。まずは大きな事故も無く、全ての催事を終えることが出来たことに実行委員会委員一同安堵いたしております。

最後に、先にも述べましたが本実行委員会の力不足により、大会準備においては上野義雪先生、白石光昭先生、松崎元先生、西岡基夫先生、学会事務局各位に多大なご指導ご助言を頂きました。誠に有り難うございました。また、遠路はるばる札幌までご足労頂いた79名の各位のご参加とご協力が無ければ本大会は成立しませんでした。実行委員会を代表して、厚く御礼申し上げます。

## ■ 学会大会・研究発表講評

### 一覧

#### 【歴史】

I 001~004 座長 高橋敏郎

II 005~008 座長 片山勢津子

#### 【人間工学】

I 009~012 座長 白石光昭

## 【計 画】

- I 013～016 座長 丸茂みゆき  
II 017～020 座長 長山洋子  
III 021～024 座長 ペリー史子  
IV 025～028 座長 森永智年  
V 029～032 座長 平田圭子  
VI 033～036 座長 渡邊秀俊  
VII 037～040 座長 早野由美恵  
VIII 041～043 座長 高橋正樹

## 【歴史Ⅰ】001～004

座長 高橋敏郎（愛知淑徳大学）

001 は本野精吾の自邸、鶴巻邸における家具26点の家具（含6点の椅子）主に椅子について分析、他1件におけるインテリア意匠について論じたものである。ドイツ留学経験があることから、「クリスマス」のリモデルで、ビーダーマイヤー様式の単純化であるが、日本の生活などを考慮し意匠的・寸法的な実験を行っている過程の作品と位置付けている。宮崎旧本社社屋・東客間のインテリア意匠は和風伝統的意匠を洋室に適用し、天井にはアールデコの意匠が見られ、天井を基準に設計されとされている。結論として、モダニズムを取り入れようとしながらも日本の文化や風土に合わせようと模索している様子が読み取れるとする。

研究対象の点数が少ないことと、デザインの様式の指摘に若干納得できないものがある。更なる研究の積み重ねを期待したい。

002 は西村伊作の家具設計について旧林桂二郎邸の家具を取り上げて実測あるいは復元図を作成し分析・考察したものである。建築は「世界における日本人の様式」を目指し、家具は「簡単に丈夫で感じの良いもの」を目指し「外国の雑誌にあるものをそのまま作らせる」ことを実践させたと指摘し、ミッションスタイルを基本にしていると結論付けている。日本人の生活に即した設計がされ生活改善を目指したことは納得できるが、当時の外国の最先端デザインを取り入れたとの論説は年代を考えるとさらに一考する必要があると思われる。

003 重森三玲の著作、記述から庭園制作の手法や理論を読み解いて行こうとするものである。

さまざまな著述の中から読み取った結論として「重森は茶室は鑑賞という美的側面を持ち、従来の模倣ではなく独自の構成を行っている。生活に溶け込ませることで、模倣ではなく創作し、発展させなければならない。設計者の作為を取り込んだ構成で芸術が生まれる、としている。

論旨は理解できるものの、例示するため数葉の画像を用いて説明しているが、論説を証明するためには重森の

実作と照らし合わせた証明が必要とされるであろう。貴重な研究であり、さらなる論証が望まれるところである。

004 谷口吉郎の多くの著述の中から「郷土美」における「美」の捉え方を追求したものである。このような研究を行う場合、言語の定義が重要であり、論説の相対的なありようだけでは語れないものがある。論中の「国土美」で述べられた論と「郷土美」中の論述との間には明らかに戦中の日本の世相が反映されており、「郷土美」中の論述には戦争直後日本の（言論界の）世相が反映されていると思われる。結論としての⑥はまさにそのような状況から生まれ出たものと考えられる。さらに広い観点から資料を精査し、「美」の構造化を実現されることを期待する。

## 【歴史Ⅱ】005～008

座長 片山勢津子（京都女子大学）

005 カリカチュア（風刺画）を史料に、近世イギリスのインテリアと陶磁器の関係を調べ、19世紀初頭までに上流階級では陶磁器が装飾品として普及していたこと、1810年までには中流階級でも実用器として陶磁器が普及していることを明らかにしている。カリカチュアを史料としている点、陶磁器からインテリアを捉えようとした新しい視点がとても興味深い研究である。新たな視点からの研究であるのでインテリアなどの概念を改めて整理する必要があると思われるが、今後の展開が楽しい研究である。

006 マッキントッシュの装飾パターンについて、ケルト文化の影響性について論じている。初期のステンシルモチーフと『ケルズの書』との類似性、薔薇のモチーフとケルト装飾の関係性、椅子の背もたれの切り抜きとケルトの結び目模様との類似性など、当時のケルト文化復興運動を踏まえて考察している。丁度、スコットランドの独立選挙の後ということもあり、時機を得た内容であった。一連の研究がどのように進んでいくのか、興味深い。

007 オーストリアの建築家ヨゼフ・フランクの『象徴としての建築』について、「象徴」を中心に考察している。フランクによると、建築的象徴は理解できるようになった時形をとったスローガンである。また、彼は明白さと大量拡大がもたらす混乱から時代はパトスを必要としているとし、独自の建築論を展開する。当時のモダニズムに対して反抗の立場をとっていたことから、モダニズム再考の新たな知見が得られる図書でもあろう。フランクからは、訳書への期待が語られた。難解な彼の建築論の翻訳が望まれる。

008 1925年に開催されたアールデコ展覧会について、対ドイツ戦略から捉えた発表である。日本では、アール

デコはモダンデザインへの過渡期様式として皮相的に捉えられているが、ここでは新たな視点として、新興工業国である対ドイツ戦略として、贅沢商品に特化して富裕層をターゲットとした新たな装飾様式を展開したフランスの状況が論じられた。展覧会見学者は、ブティック街やデパート館を巡るように誘導され、建築家やインダストリアルアートの分野は希薄だった展覧会の実情が説明された。デザイン史を理解するためには、多角的視点が必要であることを改めて教えてくれる内容である。

## 【人間工学】009～012

座長 白石光昭（千葉工業大学）

### 009 いす・シートにおけるクッション性の確保に関する検討

クッション性の変遷について概略的に背景を説明し、最近の問題点として、硬すぎるクッションが多いことを指摘している。その理由は、製造コストの低減や作り方にあると推測し、残念ながらクッション性にとっては悪い作用をしていると指摘している。

クッション性は人の構造を参考に考えるべきとの視点から筋肉と同じような硬さのクッションが望ましいとの提案で、複数のクッション材を対象に硬度を計測し、筋肉の硬さに近い材料を検討している。クッションは椅子の座り心地を左右する重要な素材であるので、このような知見をもとに安くて良い素材の開発に生かしていただくと良いと考える。

### 010 高齢者用椅子の機能性向上のための評価と改善

高齢者用の住宅向け椅子は今後ますます需要が高まると思われる、その点からは大切な研究であると思われる。本研究では、現在個人が使用している椅子の改善を目的に、良いと思われる2脚の高齢者用椅子と比較しながら、人間工学の視点から評価を試み、問題点を抽出するとともに、改善方向を探っている。今回は一人の高齢者が対象だが、その方の身長等の身体情報、また行動特性等が不明であった。この辺の記述をしていくことでより理解が深まると思われる。

### 011 自在腰掛の構造・機能に関する研究

リクライニングの傾斜角度、シートピッチ、座席幅の点からまとめようとする研究である。主に、シートの変遷概要をまとめることに紙面を割いているが、この理由を述べる必要があると考えられる。また、概要が中心になっているため、目的に対する考察が十分行われていない点が残念である。連題にするか、2回に分けて発表する等をされた方がわかりやすかったと思われる。

### 012 引戸や折戸を用いた乳幼児連れ対応トイレに関する研究

本研究は、便器と開口部の位置関係、そして扉タイプ

を考慮し、実際のトイレブースを用いて、ベビーカー利用者の動作をもとに、引戸タイプと折戸タイプの比較を行い、使い勝手を把握する研究である。その結果、1,600×1,400mmの空間であれば、ベビーカーの位置はことなるが、開口部のタイプによらず利用できることを確認している。また、便器と開口部の位置関係については、便器側方に開口部がある方が概ね評価が高いとの結果を紹介している。このようなちょっとしたハードの変化が使い勝手に大きな影響を及ぼすことがあるのだが、なかなか気が付かない場合もある。地道な実験を続け、データを集積していくことの意義は高いと思われる。

## 【計画I】013～016

座長 丸茂みゆき（文化学園大学）

013 住まいの絵本にあるインテリア表現からみた欧米文化の住の思潮を追求したものである。対象とした絵本は該当の359冊の中で主に室内を描いている182冊であり、既往報告を含め膨大な量を分析した結果となっている。色彩豊かで詳細なインテリア描写が報告され、その国の文化を豊かに感じ益々興味深い対象であることが認識できた。特に断面表現や一つの画で複数のシーンを表現している様は特徴的であった。「室礼の表現」は感性込めた描かれ方・物や場所の使い方・生活の普遍性が語られ、「意味の表現」では欧米の個人主義文化が住の思潮の形成に関与しているとまとめられている。今後は日本の住まいの絵本分析を行い比較していくとのことで次稿を楽しみにしたい。

014 昨年本学会での川本重男先生の講演を一つのきっかけとし、窓をインテリアとしてとらえるための考察が行われている。歴史の中での検証は縄文から平安、鎌倉と進み、機能としての窓、眺望、インテリアと外観との関係を検証されている。窓に対する日本人独特の感性を、我々は共通認識として曖昧に捉えているが、ここでは様々な角度や先人たちの意見を取り上げ、精神的・心理的特徴としてまとめている。長い年月を経て現代住宅まで継承されている様としてより深く理解でき、建物とインテリアを調整する日本的インテリアの窓の捉え方として認識を新たにしたい。

015 欧米の諸都市で導入が進んでいるLRT (Light Rail Transit) において、都心広場のアーバン・インテリアに関して分析したものである。対象はフランスの都市アンジェの広場である。街並みの特徴である建物はグレー系の背景となり、華やかな車両、停留のための装置やショップ、そして人々の往来による彩り・賑わいを広場に作り出せていることが報告された。広場が導入により魅力的な空間になり、街のアクセントとして機能していく可能性が示された。フランスは最もLRTの復権が盛ん

な国であり次々と開業しているが、日本でも富山市など検討中の都市が複数ある。日本に置き換えた場合はアーバン・インテリアの構成と装置の分析をどのように応用できるか今後の捉え方にも注目したい。

016 「インテリア製図通則（最終版）」が7月総会において学会の基準として承認されており、その製図実例を示し運用法の検討を行った報告である。作図上の注意点・問題点として、CADで作図を出力する場合は個々の出力環境に依存するため、統一した指定が難しい部分があることや、逆に今まで曖昧だった部分を統一表現として指定できていることなどが報告された。線の表現に関する質問があったが、そのように決定した根拠が説明され、インテリア実務として正確に伝えるための標準化は非常に重要であることがあらためて感じられた。今回は住居の作図事例での報告だったが、今後は商業系の図面での検討もおこない、広い分野での利用を目指すとのことである。約15年に渡る成果を是非活用していきたい。

## 【計画Ⅱ】017～020

座長 長山洋子（文化学園大学）

017（松本他）は、中間領域である縁や軒は広がりやゆとりを感じさせるものとし、この縁と軒が室内の大きさ感と印象評価に及ぼす影響を明確化することを目的として実験を行った。その結果、軒と縁深さがそれぞれ深くなると大きさ感は大きくなり、軒と縁の深さの和が大きくなると居心地性を高め、縁と軒の深さの差が大きくなると開放性を高めるとした。

また018（石原他）は、二方向に軒と縁のある居室と一方向に軒と縁のある居室の大きさ感および印象評価を比較した。その結果、外部とのつながりである開放性と関係性は縁と軒の深さの差が大きいほど高く、二方向の縁側・軒下空間と一方向の開放性と関係性はほぼ等しいとした。

これらの実験方法は、模型空間シミュレーターで撮影した立体視映像を被験者にヘッドマウンテンディスプレイを用いて提示するもので、被験者によって、そのとらえ方が異なるのではないかとの問いに対し、SD法評価結果による標準偏差が1以下の被験者を除きデータの有効性を高めているとした。松本らは、ここでいう大きさ感とは、数値（容積）では表すことができない空間感覚であるとしている。この数値では表せない大きさ感、空間感覚の研究は興味深い。今後の数値では表せない室内の大きさ感、空間感覚などの明確化に期待する。

019（建部）は、料亭の利用者が持つインテリア・エクステリア等の視覚的印象評価特性を把握し、年齢層や料亭利用経験の有無による違いを明らかにすることを目的として実験を行った。方法は3つの価格帯で抽出した20

店舗の写真（外観玄関、座敷、大広間、庭、廊下）を提示し、その印象について20の形容詞対を7段階で評価するものである。被験者は中高年層で料亭利用経験の有無、男女15名ずつ合計60名に行った。評価が高いサンプルは、静か、落ち着きのある、質がよいという印象の写真で、低いサンプルは人工的という印象の写真であることを明らかにした。料亭の評価基準は、歴史、広さ、価格、見た目が挙げられ、一般大衆向け価格帯の店舗でも高評価の写真があり、価格と印象にはずれがあったとした。また中高年齢層は甘い評価になり、建築関係者の若い女性は厳しい評価を下すなどの結果も示した。歴史的に価値ある料亭建築が存続していくために、さらにインテリアの側面からの支援に期待する。

020（白石）は、オフィスビルや公共施設ロビー等の大空間を想定し、文献で記載されている照明の考え方を基に作成した照明方法と利用者が感じる印象との関係について調べることを目的として低層階に商業施設があるシンプルなロビー空間を設定し実験を行った。大空間に求められる4種類の照明効果（①軽く見せる、②領域を感じさせる、③安らげる、④リズムを作る）を設定し16通りの画像をヘッドマウントディスプレイで提示する5段階解釈によるアンケート調査を行った。その結果「軽く見せる」「領域を感じさせる」ための照明方法はその効果を持つことを示した。しかし照明方法によっては効果の高さと好ましさの高さが必ずしも一致しないこと、また「安らげる」ための照明効果は光の分布の影響より色温度の影響が大きいこと、「リズムを作る」は効果が得られやすいことを明らかにした。文献に記載されている照明方法が、その効果は期待できても好ましさが伴わないこと、光分布の影響よりランプの色温度の影響が大きいことなどの結果は興味深い。これら文献による照明方法とその効果に関する研究を深め、空間の使用目的と照明方法および好ましさの関係などについて明らかになることを期待する。

## 【計画Ⅲ】021～024

座長 ペリー史子（大阪産業大学）

021（村上他） 欠席

022（近藤他） 自立生活支援のために、BMI（Brain Wave Interface）を生活機器に活用することを目指し、生活機器の中でも、重要な移動に関する機器として電動室内建具のあり方を取り上げた研究である。本稿では、身体に障害を持つ日常的に車いすを利用する人を対象とした評価実験に基づいて、室内建具の開タイミング、及び、この開タイミングに関わる健常者との違いを明らかにしている。また、ヒアリングから得られた身体の残存機能を低下させないことへの強い要望は自立支援にかか

わる際の重要な事柄でもあり、このようなきめ細かな調査に基づいての、今後の実際の運用等に関わる更なる研究が大いに期待される。

**023** (中村他) 022の研究に引き続き、生活支援を実現するBMIを活用するための住宅の基礎技術擁立に関する研究である。本稿では、BMI技術の中でも特にコミュニケーションに関わる部分を取り上げ、要介護者を対象として実施されたヒアリングから、コミュニケーションに関わる多様な意見を分析し、コミュニケーションツールとしてBMIへの潜在的ニーズや期待される内容を明らかにしている。BMIのインテリアへの具体的な反映としては、センサー設置等でインテリアの作り方自体に大きく影響を及ぼすという事でもあり、研究の継続的な発展が望まれる。

**024** (丸茂他) インテリアに木材を利用するためには、建築・インテリアを学ぶ学生が木材に触れる事が重要であるとの視点から、平成22年から続けられている授業に基づいての、学生の木材への意識や木材の特徴とデザインの関わり等に関する教育効果についての研究である。この取り組みがもたらす、木材に対する意識の高まり、木材という材料の特徴とデザインとの関わり、制作活動を伴う事による達成感等を明らかにしている。受講後には卒業研究等で木材を考える学生もできてきているという事であり、木材と学生との距離を近づけるためにも今後の更なる展開が楽しみである。

#### 【計画Ⅳ】025～028

座長 森永智年 (九州職業能力開発大学校)

**025** は、大型商業施設の外部敷地内にある休憩スペースについて、この店舗を利用する地域住民が望む休憩スペースの居住性を満足する植栽の役割、椅子の向き、椅子と植栽の関係、植栽によるスペースの囲われ方を、アンケート結果をもとに報告されたものである。植栽は、異なる用途を分離する役割の他に、来店をしたくなる役割を求められていることが示された。今回の報告は、駐車場から離れた店舗に近い位置に配置された休憩スペースのものであり、駐車場と休憩スペースの関係については今後の研究の進展に期待される。

**026** は、大型商業施設の地域特性を活かした施設内住民交流空間の創設に向けた調査報告である。施設内交流の場を広島市郊外に位置する4商業施設と市北部の山間部に位置する3商業施設の地域的特長と施設内住民交流の現状報告であり、一部店舗の運営者へのインタビューをもとにしたものである。利用者側が大型商業施設にどのような交流の場を望んでいるのか、運営する側と利用する側では立場と目的が異なるので、双方の視点より「地域住民の交流の場」のあり方を客観的な視点より研

究をされることを期待したい。

**027** は、広島市内にある分譲開始から20年が経過した戸建住宅団地の接道に面する外構部の植栽、塀、門扉、駐車場など外部に表出あるいはあふれ出ている物に対してそのスタイルと特徴を類型化した報告である。内容が整理されまとまりがよく、わかりやすい発表であった。会場からの質問としてもあったが、玄関へのアプローチの方位により植栽の種類や日当たりの加減が異なるので、方位とその類型化との関係が示されると、より実用性が高いものになると思われる。

**028** は、長崎県長崎市池島の再整備計画の途中経過報告である。池島は炭鉱の島として、2001年まで栄えた島であったが、閉山に伴い、現在では人口も200人程に激減している。この再整備計画では、島内の公共施設の集約化と炭鉱の近代産業遺産を観光資源とするとともに、ノルウェーの「ナショナル・ツーリスト・ルート」を手本に新たな観光産業の開拓を視野に民間参加型の開発を目指している。福岡市を除く九州全域の地方都市での人口減少が顕著なかで、地域活性化につながる今後の展開が期待される。

#### 【計画Ⅴ】029～032

座長 平田圭子 (広島工業大学)

**029** 30坪ほどの小さい家を対象とした、構造体の壁内部にどのような生活用品が収納できるか壁の内寸から求めようとしている研究である。本報では、収納対象のものを靴・単行本・DVD・マグカップ・シャツ類とし、置き方によって収まるかどうかを検討し、置き方によっては収納が可能であることを確認している。今後、各空間の可能性をさぐり、研究が進めば金具の商品化なども範囲に入ってくる。質問者からは、共感する声や、棚の加重についてなどの質問があった。壁内部に収納される量と必要な置き場所の居室にて可能な収納空間量との関係に興味を持たれる。この先の展開が望まれる研究である。

**030** 住宅インテリアに対する建築設計の専門家のとらえ方について、30歳代～40歳代の若手建築家にインタビューを行っている。発表者も記載しているように「インテリア」のとらえ方、定義によって様々な回答になってくると思われる。質問者からは、発表者自身がどう考えているのかという質問と、インタビュー被験者の経験年数や、対象とする建物の坪単価の違いによってインテリアのとらえ方の違いがあるのではとの質問があった。今後、どのような仮説をたてて検証していくのか、期待される研究である。

**031** イメージコラージュ技法を用いたテキストマイニングにより、インテリアについての専門家と非専門家と

の認知の違いについて求めようとしている興味深い研究である。分析結果として、被験者の属性の違いによるインテリアの認知傾向を把握した結果、専門家はデザイン要素・素材にかかわる見方、学生は嗜好的判断、一般人は生活に根ざした見方をしていることが得られている。また、被験者属性とコード（コンセプト）のクロス集計をすることによって、専門家はデザイン性とスタイル性のコード（コンセプト）が多く、一般人は居住性、学生は嗜好性・文化性が顕著に表れていることが得られている。質問者からは、専門家の居住性のとらえ方が少ない理由などの質問があった。

032 日本の百貨店及び専門店のファッション系のショーウィンドウを対象として、空間構成・色彩・デザイン・照明などを分析することによって、どのように「立ち止まってみよう」と思わせるか、ショーウィンドウディスプレイの特徴を明らかにする研究である。結果として、ショーウィンドウ内の空間構成が複雑でわかりにくいこと、複数の商品が分散して置いてあること、商品の目立ち方は背景と調和して目立ちすぎないこと、商品以外の飾りは多めであることなどがあげられている。現在は「立ち止まってみよう」という視点に立っているが、得られているような結果は、見る人に多様な種類の商品が店舗内に存在していることを想像させ、入店動機へとつなげていくのかもしれない。今後はアイマークレコーダーを使用して分析するようなので、結果が楽しみである。

#### 【計画Ⅵ】 033～036

座長 渡邊秀俊（文化学園大学）

033 は、高齢期女性が自宅の中において就寝以外で一番長く過ごす「居場所」で使う収納用具の推奨モデルを提案・制作し、検証したものである。高齢期女性の生活実態に関するアンケート調査結果から導かれた具体的な人物像・生活像をもとにして、6タイプの実験用収納用具が提案された。また、これらの収納用具についての5名のモニター（68～78歳）による評価結果、2名のモニター宅の収納を中心とした生活実態が報告された。本研究は、調査結果にもとづいた具体的な提案・制作とその検証という整った研究プロセスが特徴である。今後は、退職後の高齢期男性の自宅内における居場所についても研究していただくことを期待したい。はたして居場所はあるのだろうか。

034 は、033の続報である。もともとはパネル発表を前提として執筆された内容であるため、033で紹介された収納用具の制作に至るまでのプロセスについて詳細な報告がなされた。実物大の部屋において室内の様々なエレメントを任意に設定できる「居室可変システム」の制作

プロセスの紹介、その中に設置するエレメントの一つである「可変収納システム」の紹介、そして033の「収納システム」の紹介がなされた。高齢者の生活実態調査の結果にもとづいた空間・家具のデザインプロセスには説得力が感じられた。インテリア分野における研究とデザインの相補的な関係を示した一例であろう。

035 は、身体を動かすための神経系が変性して徐々に身体が動かせなくなる筋萎縮性側索硬化症（ALS）の患者の在宅療養の実態についての報告である。本研究では、4名の在宅ALS患者の住宅への訪問調査ならびに患者と介護者へのヒアリングを実施した。その結果から、療養空間として必要になる部屋の広さ、モノの種類とその置き場所、使い勝手をよくするための工夫について分析している。人工呼吸器などの高度な医療機器を自宅にとりこんだ在宅療養室を実現するためには、インテリアの視点からも様々な課題があることが示唆されていた。特に2DKをワンルームにリフォームした事例は、医療空間と住宅空間の差異と、現状における齟齬が感じられる貴重な事例報告であった。

036 は、インテリアの専門家を対象にして「現代インテリア」をどのようにとらえているかについてアンケート調査したものである。その結果、現代インテリアと認識されている作品は1980年以降であり、背景には、環境への配慮、CAD・CGなどの利用、少子高齢化、情報化、国際化といった社会的動向に対応しているか否かが関係していることなどが報告された。インテリア作品に対する現代性を明確にすることの目的すなわち研究の社会的価値については、様々な視点があるであろう。また、現代性という概念は時代とともに遷移していくことも事実であることを鑑みると、今後、この研究が向かう先に期待したい。

#### 【計画Ⅶ】 037～040

座長 早野由美恵（東北芸術工科大学）

037（若井、阿部）は、東日本大震災直後に発生した原発事故により当該避難区域に立地していた知的障害者支援施設が応急仮設施設に避難するまでの経緯と、その利用実態および問題点などを調査報告した。本報告は、応急仮設施設の具体的な部屋の使われ方、狭小な床面積と入所者の関係、各棟を繋ぐ開放的な「オープンデッキ」が季節によって長所が短所に変化することなど室内装備の問題点や改善点などが指摘された。それらの結果から、緊急災害時の「福祉避難所」の必要性が改めて強調された。当該施設で得られた教訓が同様の福祉施設の避難時の対応や改善に繋がる有益なデータとなることを期待したい。

038（古庄、高橋）は、昨今の社会的問題である「居住

の貧困」を取り上げ、その連鎖の仮設モデルの検証において、貧困の最初の問題として「安心して住める場所がない」ということから検証を行なった。その検証において、学生へは「貧困問題」への意識調査と、貧困状態にある人へはヒアリングの調査とを行ったもので、それぞれの結果と考察は、興味深い内容であった。貧困の連鎖を断ち切るひとつの手段として「居住の安定」に着目した新規性のある本研究は、「インテリア学」の視点からの今後の展開と更なる解決案に期待したい。

039 (廣瀬) は、高齢者の居住安定に関する研究について報告された。高齢化の進む中、住み慣れた地域で住み続ける重要性が増している反面、居住安定は確保されているとは言えないのが現状である。本編は、法制度に改正される中で、2011年からの「高齢者・障害者・子育て世帯居住安定化推進事業」に採択された事例を対象とした調査概要と結果、考察、今後の課題について報告した。本調査では、アンケートを実施して、その結果は、主に1. 住戸面積、2. 併設施設、3. 入居者属性等の興味深い内容にまとめられた。今後は、居住安定向上に資する取り組みに必要な要素について、さらに考察を進める必要があるということで、今後の研究の進展に期待したい。

040 (柳、申) は、統計庁の予測によると、2017年には高齢社会に突入する韓国は、OECD国家のうち高齢者の貧困率が最も高く、彼らの住居問題の深刻化に着目したものである。本報告では、その解決策のひとつとして養老施設の増加が考えられると、ソウル市内の19カ所中11カ所の、独居老人に該当する施設を対象に各スペースの写真撮影と、施設の管理者への調査紙記載の結果が個室、共有、医療、サービス、管理という5つの種類の空間構成について、実際の写真を提示して報告された。具体的なアンケート結果、分析の数値化についての質疑があった。今後の深化した調査研究により、これらの施設の合理的かつ効率的で快適な空間創造への一歩として期待したい。

#### 【計画Ⅷ】 041～043

座長 高橋正樹 (文化学園大学)

041 は、手すりの設置や改修を実際に試みることにより、仮設住宅において高齢者に必要となる住環境の要件とは一体何かを明らかにする研究である。その結果、手すりの設置が居室内移動の安全性を確保する役割やトイレ・玄関での立ち上がり等に役だっていることが確認された。住戸内の移動が容易になる一方、外出頻度の増加には直結しなかったことを今後の課題としている。このような「コミュニティケア型仮設住宅」に関する研究では、現状の分析だけでなく実際に改善を行い、どの程度

それが有効であったかを検証する開発的研究が今後も重要になると思われる。

042 は、これまで病院の建築計画において見過ごされがちだった食堂や喫茶室に焦点をあてた研究である。病院には外来患者、入院患者、見舞客、医療従事者など様々な人がおり、施設を利用するだけでなく生活の一部になっている人もいる。食堂や喫茶室は単に食事をする場ではなく、色々な場面で使用され、特に気分転換を図れる場所として重要であるとの仮説に立っている。アンケート調査の結果、一般食堂、喫茶室そして職員食堂は、それぞれ利用者の利用目的、利用時間帯そして利用者層が異なることがわかった。一般食堂は高齢者の利用が多く、喫茶室は利用時間が短いこと等が特徴とされた。今回の結果を鑑み、喫茶室は外来患者の診察前の利用を想定し、緊張を和らげるような内装や病状に応じた待ちやすい座席形状等が望まれると考察している。病院というアンケートを実施するには難しい状況の中で意欲的に調査を行い、貴重なデータを得た研究である。

043 は、院内助産システムにおける空間の特性に関する第4報である。関東と関西の4つの施設を対象に先進的独創的な環境改善の実施例を紹介しその特徴を考察した研究である。「院内助産システム」とは、分娩を生活の自然な営みの一つとして捉えようという視点から医療施設に導入が推進されているシステムである。視察等による調査の結果、すべての対象施設が経過中に室移動の必要のない一室対応型の分娩空間であった。また水中分娩設備や畳コーナー設置等による既定外の分娩様式への対応が整備されている等の先進的な取り組みがなされていた。また独創性の観点からは分娩空間にインテリアスタイルのバリエーションを持たせた事例も見られた。今後は、これらの事例を元に院内助産システムの空間計画を体系化することが望まれる。

#### 【パネル部門】 044～047

座長 鈴木敏彦 (工学院大学)

044 は、通信販売での利用を目的とした、組み立てと開封の機能向上をめざした段ボール箱開発の成果を報告した。既に商品化されているので一定の完成度があり、組立と開封の作業の実演をとおしての解説には説得力があった。

045 は、サテライトメディアライブラリーと称する図書空間を既設小学校の学習ルームの片隅に設え、利用児童の行動観察およびアンケート調査によりその存在意義を検証した。

046 は、JRの観光キャンペーンの一環として、山形駅の新幹線ホームに観光客を出迎える為の空間展示を産学共同で創作した。「山形らしさ」をテーマに山形駅職員



と東北芸術工科大学の学生が一丸となりセルフビルドした経緯を報告した。

047 は、韓国で最初に開発された高齢者専用団地である「Segok Rien Park」を事例として、老人専用集合住宅の外部空間を独自のチェックリストによる評価結果を報告した。

## ■平成26年度運営委員会だより

### □総務委員会

委員長 白石光昭（千葉工業大学）

本年度の大会を無事に終えることができ、ほっとしています。無事終えることができたことは、大会開催校でたった一人で対応していただいた石橋先生のおかげです。心から感謝申し上げたい。また、それをサポートしていただいた研究室の学生さんたちにも感謝を致します。毎年開催する発表大会は基本的には各支部の持ち回りであり、それぞれ多くのご苦勞があると思いますが、今後も学会活性化のため、ぜひご協力をお願いいたします。

さて、昨年から今年にかけ、各支部にはいろいろご協力を頂き、新しい理事・評議員が選出されました。なお、会長・副会長はこれまでと同じ方々になりました。総務委員会としては、会長・副会長の補佐として、各理事の方々とも連携をはかり、学会運営をしておりますので、ご協力いただきたいと思います。

### □広報委員会

委員長 湯本長伯（日本大学）

#### 1) メールニュース

広報委員会では、インテリア学会メールニュースの発行を続けています（現在60号）。メールアドレス登録者は154名で余り増えませんが、過去のニュースは広報委員会ホームページにすべて残してあり、追って見ることができます。皆様の一層のアドレス登録を、お願い致します。

<http://www.arch.ce.nihon-u.ac.jp/~yumoto/JASIS/mailnews/mailnews.html>

2) 今号の会報編集長は、片山勢津子（京都女子大学）委員です。今号から年間発行回数を、3回から2回として原稿をお願いしています。総会後・大会前号と大会後・発表概要座長講評号は中身がありますが、年報と称していたものは目的が明確でなく、また何時も原稿が集まり難いので、整理することが適当だと思います。予算等は、さして楽になる訳ではないと思いますが、当面は本

学会の現状に合わせて行かざるを得ないと考えています。ご意見を戴ければ幸いです。

また会報に会員の意見を代表して反映戴く編集委員ですが、北海道のメンバーが居られません。毎号、広報委員会への参加をお願いしていますが、北海道・九州等のメンバーを改めて募集致します。また片山委員（関西支部長、論文審査委員）が諸般の事情で抜けられるので、近畿ブロックは松田委員に頑張ってもらっています。現状は実質5名で頑張っているところです。

なお過去の会報は保存性も考え、ホームページで閲覧可能に致します。広報委員会HPを参照下さい。

<http://www.arch.ce.nihon-u.ac.jp/~yumoto/JASIS/journal/journal.html>

#### 3) 編集委員の仕事

会報編集の作業は、会報目次の作成と原稿依頼への準備、および原稿催促です。実際のレイアウト等は湯本が大学スタッフにお願いしており、編集長の仕事は企画と原稿依頼・督促関係の人的ネットワーク作業が中心で、直接の編集・レイアウト作業等の労働はありません。常任委員ということではなくても、ご意見やこれを掲載して欲しいという情報提供があると、大変に紙面向上の助けとなります。

という訳で、意見や企画をお持ちの会員各位の積極的な参加をお願い致します。地域的なバランスや、年齢的な多様性も欲しいのですが、当面は無理かと思っておりますので、ご意見を戴ければ十分です。

広報委員会へのご連絡は、当面は下記までお送り下さい。送り先メールアドレス

[jasismailnews@yahoo.co.jp](mailto:jasismailnews@yahoo.co.jp)

### □国際委員会

委員長 加藤力（京都大学）

今回はありません

### □論文審査委員会

委員長 松本直司（名古屋工業大学）

本年度7月より募集しました東アジア地区のインテリア学会関係論文集・AIDIA2014につきまして、会報54号ですすでにご報告しましたように7編の応募をいただきました。審査の結果7編すべてが採用となり、9月中旬に日本インテリア学会（JASIS）事務局を通して韓国のAIDIA事務局に原稿を送付しました。論文集はすでに発行されており、12月末の時点でJASIS事務局に届いているとのこと。このところ、論文集の発行がほぼ予定通りになってきているようです。論文査読をお願いした

査読員の先生方には、査読にほとんど遅滞なく対応をいただき有難うございました。

現在、論文報告集（JASIS25）の審査を行っております。応募は13編ありまして、そのうち一編は規定のページ数をオーバーしておりましたが、学会員全員に関連する重要な内容のものと審査委員会で判断しましたので、「特別報告」とさせていただきます。今年度こそは年度内にお届けできるように、印刷所とも調整して進めております。

審査委員会は、加藤、直井、西出の各先生方と私を含めた4名でしたが、本年度より新たな委員として、片山勢津子先生と渡辺秀俊先生に加わっていただき6名体制になっております。

論文報告集の発行は、学会において最も重要な事業の一つです。皆様には、これからも積極的にご応募ください。よりよい論文報告集の発行に向けて審査委員会一同、頑張っけて参りたいと思っております。会員の皆様におかれましては、ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

## ■平成26年度支部だより

### □北海道支部

支部長 小澤武（小澤建築研究室）

この度前支部長・小林先生の退任に伴い、支部長の任に就きました。

25回の学会大会のうち24回に参加。オリンピックではありませんが、私が学会員として誇れるたった一つのことです。そんな私の初任務が第26回大会の企画になりました。やはり小原先生との因縁なんだと感慨深いものがあります。

北海道東海大芸術工学部（旭川市）の閉校と小林先生の退任は支部のホームを失ったごときの衝撃でした。

この場をお借りし改めて小林先生に「長きにわたりご苦勞様でした」と申し上げます。今後の運営については不安ばかりですが、健康体の支部づくりを心掛け、次の世代へバトンを渡すことが私の役割と考えています。

デザイン・インテリアを軸に展開している教育機関が道内あまりに少なく、会員の発掘・連携を考える時突破口が見えてきません。幸い今大会の実行委員長として労を取っていただいている北海学園大・石橋達勇先生と知己を得、光明が見えてきました。JIA（日本建築家協会）では函館地域会委員長として若手建築家の掘り起こしを進めていますが、「建築・まちづくり」といった切り口からインテリアに導くことができればなどと思っております。

地域間の移動時間のハンデは会員相互の親睦、会合を難しくしているのが現実とはいえIT活用等で乗り越えていかねばならないでしょう。石橋先生を始め支部会員皆様の力をお借りしてコツコツと活動していくしかありません。

全国の会員の皆様、どうぞ北海道にエールを。

### □東北支部

支部長 早野由美恵（東北芸術工科大学）

本年度の東北支部総会および記念講演会等は、平成26年11月22日（土）に東北芸術工科大学において開催いたしました。新支部長に就任した筆者の挨拶があり、その後、本年度の事業報告と決算報告、次年度の事業計画案と予算案が審議され、原案通り全会一致で承認されました。また、当日出席の山添英順氏（盛岡市）が、新たに東北支部監事に就任することになりました。

総会終了後、早野支部長が「イタリア探訪 祈りの街アッシジの教会と街並」という演題により記念講演会が開催されて、参加者から活発な質疑応答がありました。その後、参加者全員が山形市内にある割烹「千歳館」の敷地内にある別館に移動して懇親交流会が開催されました。席上、本年度の日本インテリア学会名誉会員となられた日原もとこ氏のお祝いを兼ねた祝賀交流会となりました。

会場となった千歳館は、本館正面に車寄せを持つ洋風建築で、四季折々の花木を植えた日本庭園（中庭）があります。明治4年に当時の山形市北部の大半を焼き尽くした大火によって、県庁や市役所とともに千歳館も全焼しましたが、大正4年に再建され、2002年に国の有形登録文化財に指定されました。最近、人気映画「るろうに剣心」の一場面に、主人公の剣心（佐藤健）が元新撰組の齋藤一（江口洋介）たちと会う京都の料亭として、この千歳館が舞台となりました。当館のオーナーが、日原もとこ氏とも旧知の関係ということで、急遽、当館の見学会を開催しました。大正ロマンあふれる本館内部のインテリアは、使用されているケヤキや黒柿などの材料の見事さと、約五間もある柱間、繊細で奇抜な建具、空間のすばらしさ等々、全てにおいて圧巻でした。

次回の東北支部行事での再会を祈念して、盛況のうち閉会となりました。

### □北陸支部

支部長 棒田邦夫（金沢学院大学）

来年の3月14日より北陸新幹線が開業するというので、石川県内はもとより金沢市内もいろいろな施策で盛り上がっています。10月24日、25日の金沢大会多くの会員が

参加して下さるよう大会内容を創意工夫しております。中でも、今大会では口頭発表を24日(土)午後に行い、25日(日)は発表の緊張を解いていただいで、ゆっくりと金沢の街、文化と食を堪能していただこうと2日目に見学会、講演会を考えています。また、大会、交流懇親研究会、講演会の場所も参加者の便を考え、金沢駅から徒歩10分の金沢勤労者プラザで開催します。金沢駅に降り立って、再びバス等により乗り換えての面倒な移動を軽減しましたので、時間を有意義に使えると思います。金沢駅からですと歩いても1時間で近江町市場、東茶屋街、歴史博物館及び散策路、兼六園、武家屋敷と周遊できます。会員皆様の参加を心よりお待ちしております。

一方、北陸支部の事業として今年度は2つの講演会を実施しました。9月3日(水)は富山県総合福祉会館サンシップ富山にて富山ICC様のご協力のもと上野義雪先生をお迎えして「何でも人間工学というレンズから覗いたインテリアに関わる「ひと・もの・空間・設備」への発想」の講演をいただきました。11月8日(土)はカリモク家具金沢ショールームにて石川ICC様のご協力のもと藤村盛造先生をお迎えして「オフィス家具の役割」の講演をいただきました。両先生には、お忙しい中石川県、富山県にわざわざお越しいただき、この誌面をお借りして深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

結びに、次年度は金沢大会を控えておりますので、講演会等の事業はできませんが、翌年からは新たな事業を考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



## □関東支部

支部長 内田和彦 (岡村製作所)

支部幹事改選を行い、新体制で今期活動がスタートしました。何分にも不慣れなため求められている役割を果たせるか不安はありますが、着実な歩みで前進していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

### 26年度体制

支部長：内田和彦 (岡村製作所)

副支部長：長山洋子 (文化学園大学)

新幹事13名で協力して以下の活動を行っていく計画です。

### ① 関東支部見学会 (2014年12月5日)

「SHARE yaraicho」(2014年建築学会作品賞受賞)において、設計者である篠原聡子氏自らによる見学案内、その後現在に至るまでの講話をいただく予定です。

### ② 関東支部総会 (2015年2月)

関東支部としては初となる支部総会を開催する予定です。併せて若井先生に講演をお願いして日本建築学会東北支部の発行した「2011年東日本大震災報告書」をベースに震災直後の報告からその後の調査復興の近況などについてお話しいただく予定です。懇親会も同日に開催し、関東支部会員相互の懇親、情報交換の場づくりとして定期的に継続開催していきたいと考えています。

また、関東支部が母体となって活動をしている東日本大震災課題検討部会は本年度より下記体制にて運営していきます。

東日本大震災課題検討部会26年度体制

部会長：鈴木敏彦 (工学院大学)

副部会長：川島平七郎 (居住環境研究所)

都立高校において実施されている宿泊防災訓練の一環として鈴木部会長を中心にダンボールシェルターを使用した避難所生活体験が10月18日に行われました。

また、東日本大震災課題検討部会では、震災発生6か月後に被災地視察を行い、現地の要望を聞き、被災された方々のコミュニケーションを活性化するためのテーブルや椅子を現地に送る活動をしてきましたが、今年度は川島副部会長を中心に東北支援インターンシップとして学生に呼びかけを行い被災企業に看板を寄贈するという企画を実施しました。2014年11月4日に現地を訪れ看板寄贈先企業に歓迎していただきました。



仮設店舗の看板を背に 2014. 11. 04.

## □東海支部

支部長 河田克博 (名古屋工業大学)

10月10日(金)に、当支部も名を連ねている中部インテリアデザイン連絡会のリレーセミナーで、KUU・KAN設計室代表(もと日建設計)の佐藤義信氏による講演

会を開催しました。演題は「続 日本の文化・和」で、「続」と付いているのは、昨年インテリア学会東海支部で、同名の講演会をしていただいたからです。佐藤氏は、京都迎賓館の主設計者でもあり、前回よりブラッシュアップした魅了させられる写真とともに、日本の文化と和のインテリアのあり方を考える、インテリア学の見地からも大変興味深いお話で、約60名の参加もあり好評でした。

また東海支部は、本年度支部創立25周年を迎えます。当支部では5周年ごとに、記念の講演会や海外旅行を行っています。今回は、2015年3月1日（日）～8日（日）の予定でアンコール遺跡と関連施設をたっぷり視察いたします。

## □関西支部

支部長 片山勢津子（京都女子大学）

今年度のメインの支部活動として、9月28日（日曜日）に今年完成した2施設を見学しました。

見学先は、北千里の「住まいの絵本館」と梅田の「希望の壁」です。「住まいの絵本館」は、関西支部元支部長である北浦かほる先生（大阪市立大学名誉教授）が実家に新築されたNPO法人「子どもと住文化研究センター」の活動拠点です。当日は、先生自ら設計された建物の見学だけでなく絵本の読み聞かせ体験もしました。一方、「希望の壁」は梅田スカイビルの敷地内にできた巨大な



「住まいの絵本館」での絵本の読み聞かせ



「希望の壁」見学風景

緑化壁面で、大阪の緑化推進の一環として安藤忠雄氏が設計した構築物です。今回は、特別に壁の内部に入ることができ、担当者から建設の経緯や植栽の説明を受けました。さらに隣接する「新里山」も詳しい説明を受けながら見学することができ、都市の緑化を考える貴重な機会となりました。

当日はお天気にも恵まれ、関連団体（関西インテリアプランナー協会）や遠方からの参加者も含めて18名の見学会でした。見学会後、貸切バスは難波リバープレイスまで向かい、懇親の会を持ちました。詳細は、支部HPをご覧ください。www.jasis-kansai.jp/

## □中国・四国支部

支部長 平田圭子（広島工業大学）

### 1. 見学会

■題目：『興雲閣とモダンデザイン』

■日時：平成26年9月28日（日）10：00～17：00

■内容：1. 興雲閣と周辺建築群見学（場所：松江城周辺）

2. シンポジウム（会場：島根県民会館）

・基調講演『興雲閣と明治建築の魅力』

講師 足立正智 氏

・パネルディスカッション

パネリスト 灰山彰好 氏

中川裕二 氏

足立正智 氏

コーディネーター 小林久高 氏

■参加者：35名（インテリア学会員以外の参加者も含む）

中国・四国支部では、平成26年9月28日（日）、島根大学COC事業・島根大学ウッド・デザインプロジェクトセンター等との共催で『興雲閣とモダンデザイン』というテーマで見学会とシンポジウムを行った。

午前中に『興雲閣』の見学を行った。興雲閣は松江城内に1903年（明治36年）に明治天皇行幸時の御宿所として建設された迎賓館で、島根県指定有形文化財に指定されている。老朽化が進んでいるため、建物の構造形式に変更を加えないという方針のもと、初めての大規模改修を行っているところである。そのため、床下や天井裏・壁の中等、普段は見ることができない箇所まで見学することができた。また、松江市及び改修業者による説明と質疑応答も行われた。その後、興雲閣周辺の菊竹清訓設計の建築群の見学も行った。

続いて、午後からは、シンポジウムを行った。（社）島根県建築士会会長の足立正智氏が『興雲閣と明治建築の魅力』と題した基調講演を行い、その後、興雲閣の今後の活用の仕方を中心とした古建築の保存と活用をテーマ

にシンポジウムを行った。シンポジウムでは活発な意見交換がなされた。松江市の担当者は「今後の方向性を考える上で重要な意見を頂いた。計画に取り入れることができる部分は取り入れて行きたい。」と喜んでおられた。

中四国支部にとっても、松江市にとっても、有意義な活動であった。（見学会企画：島根大学 正岡さち 記）



## 2. 講演会

■題目：マエストロ 石井高 お話し会

■日時：11月21日（金）

■内容：一部 お話会&演奏

講師 石井高 氏

ヴァイオリン 白井朝香 氏

二部 わいわい懇親会

■参加者：65名

音楽好きの中国インテリアプランナー協会事務局が企画した講演会の共催事業である。豊かなインテリア空間とヴァイオリン製作のこだわりの共通点について興味津々で参加した。石井高氏がヴァイオリン製作へと惹かれていく話から、木と音とインテリアはちょうど良い時にやめる絶妙なタイミングが大切だというお話など、石井氏が製作・修理されたヴァイオリンの音色を聴きながら贅沢な時間を過ごした。

☆興味深かった石井氏の言葉☆

「日本で住んでいる時に、曲線は直線を曲げたものだと思っていたが、イタリアで生活するようになって、イタリアの気候・風土、食事、コミュニケーションを体験し、その地に根付いてきたからこそ表せる曲線があることを知った」

## □九州支部

支部長 森永智年（職業能力開発大学校）

報告者 西山紀子（九州女子大学）

去る10月23日、第6回九州インテリアコーディネーター協会協議会（湯本長伯会長）交流会が北九州市で開催され、門司港レトロ地区の見学会には当支部も、九州職業能力開発大学校専門課程建築科から1名、九州女子

大学家政学部人間生活学科から10名、計11名の学生を募って参加しました。門司港には、外国貿易として栄えた頃の建造物が残っており、これらを保存、活用し、「門司港レトロ地区」として観光開発が進められてきました。なかでも大正時代に建てられた「門司港駅本屋」と「旧門司三井倶楽部」は重要文化財の指定を受け、その中心をなしています。当日は、現在門司港駅本屋の修復に取り組まれている、文化財建造物保存技術協会事業部の今岡武久氏から、これら2建造物の保存に関する講義を受けました。参加したインテリアコーディネーターの方々とともに学生たちも熱心に解説を聴き、修復保存のための解体調査によって建造物の歴史が紐解かれていくさまや、現状変更して資料の確実な年代に復元される作業、またそれらをアーカイブとして残していく実態に感銘を受け、文化財建造物保存の意義を再認識しました。その後、駅の作業現場を専用デッキから見学しましたが、軒先のディテールを目の前にするなど日常にはない経験ができ、一同感動の渦に包まれました。また、学生たちはこの見学会を通して、文化財建造物保存技術協会事業部の女性スタッフが修復の工事現場で活躍していることを知り、今後の進路を考えるうえで勇気づけられた様子でした。

天候に恵まれ、旧門司税関、旧大阪商船など他の歴史的建造物を見学しながら地区を散策し、昭和初期に建てられた木造3階建ての料亭「三宜楼」での昼食会では、教育と実務の立場から、さまざまに情報交換がなされました。



## ■平成26年度研究部会だより

### □歴史部会

部会長 河田克博（名古屋工大）

今年度の見学会は、大会に合わせて大会実行委員会との共催で、2014年10月25日（土）に札幌にて開催いたしました。北海道の明治村といわれる「北海道開拓の村」、

およびアントニン・レーモンド設計の木造建築「札幌聖ミカエル教会」を見学しました。北海道開拓の村では、2班に分かれて見学。とくに旧青山家漁家住宅と旧広瀬写真館では内部を丁寧な解説をしていただきながらの見学で充実した内容でした。開拓の村全体には、重要文化財を含めて52件の建物があり、限られた時間では全部見れないことが少し心残りでした。また、札幌ミカエル教会も解説付の見学。屋根を支える木造の小屋組形態の構造美に一同感動しました。26名の少人数の参加でしたが、好評される見学会でした。

## □計画・構法・デザイン部会

部会長 栗山正也 (KDアトリエ)

今回はありません

## □人間工学部会

部会長 白石光昭 (千葉工業大学)

年度末に研究会を予定しておりますが、詳細は未定です。決まり次第、ハガキ等でお知らせする予定です。なお、皆さんからのご要望があれば受け付けますので、関心のあるテーマがある方はぜひご連絡下さい。

## □教育部会

部会長 河村容治 (東京都市大学)

今回はありません

## □研究協議会

議長 栗山正也 (KDアトリエ)

今回はありません

## □東日本大震災課題検討部会

支部だより・関東支部を参照下さい

次回より部会長を鈴木敏彦先生 (工学院) にお願ひしております。

## □現代インテリア研究会

部会長 長山洋子 (文化学園大学)

現代インテリア研究会では10月、北海道大会に合わせて現代インテリア100選候補作品の現地視察を行った。

まず、六花亭真駒内ホール店 (古市徹雄都市建築研究所設計、2002年竣工) へ向かった。この空間は通常は菓子店舗として使われているが、月に一回コンサート

ホールに変身するというものである。ホール右手奥の正面にはステージが設えられ、両サイドは分厚い木製ルーバーが設置され、店舗時にはルーバーを開け放している。天井まで設けられた全面開口 (サッシュレスカーテンウォール) が公園のポプラ並木をインテリアに取り込み、店舗空間に広がりを与えている。ショーケースは可動式で3時間以内に片付けられ、コンサート空間に変身するという。ホール左手にはカフェとして営業している小さな空間がある。ここはコンサート時にはホワイエになり、赤く塗られた壁面がインテリアのアクセントとしてモダンな印象を与える。コンサート時には木製ルーバーを閉じ、コンサート空間として求められる音響の反射をもたらすのだという。この新技術・新素材を巧みに利用している点、家具のシステム化など、インテリアの多義性・転用性の一つのあり方を提示している点に現代性を感じた。乳白色のガラス合わせでデザインされた化粧室洗面台のインテリアにも斬新なアイディアも興味深い。

次に札幌市中央区の中島公園近くにある「渡辺淳一文学館」(安藤忠雄設計、1998年) へ向かった。ファサードに設けられたRC打放しのブレースは雪面に片足で立つ白鳥をイメージして設計したという。小規模な文学館は入口から奥の図書スペースまで見通せる。吹き抜け空間のコンクリート打ち放しの高さ10mはありそうな壁面いっぱいに設けられた木製書棚は、無機質なコンクリート打ち放し壁と有機的な木材とを調和させていた。この手法はその後設計された幾つかの建築にも用いられている。地階の講義室は音響に考慮した設計であり、講演会の他、演奏会などにも使われるという。この日は演奏会が行われていて残念ながら見学は出来なかった。建物全体を通して極寒の北海道に建つ建築ならではの印象は薄かった。

最後は「ろいず珈琲」である。この建物は北海道帝国大学の小熊捍教授の自邸で、フランク・ロイド・ライトに師事した田上義也が設計したものである。この建物は市民の存続・復元運動により、平成10 (1998) 年に、藻岩山ロープウェイ入口に移築され「ろいず珈琲」として使われている。オリジナルの旧小熊邸は平成10年5月に解体され、現在の建物は窓や扉建具、階段、照明など要所にオリジナルデザインのパーツをちりばめて復元されたものだった。外壁の羽目板の水平性を強調した外観、ライトのモチーフ幾何学形を用いた窓や照明器具などライトの影響を強く感じさせるデザインが残されている。市民主導の復元やパーツの復元など手法の現代性はあろうが、創建時固有の場所性の喪失はやや残念であり、現代インテリアというよりは、時間があれば一日ゆっくり過ごすのも悪くない、というのが素直な感想であった。天気も良く思った以上に暖かい空気の中、北海道の建築・インテリアを堪能した一日だった。(参加者: 川島、北浦、齋藤、大内、長山)



月に一回コンサートホールに変身する六花亭店舗空間



壁面いっぱい設けられた木製書棚



カフェはコンサート時にホワイエになる小さな空間



「ろいず珈琲」秋の夕暮れ—ライトへのオマージュ



ライトの影響を強く感じさせる幾何学形を用いた窓



「渡辺淳一文学館」雪面に片足で立つ白鳥をイメージした外観

## □インテリア環境研究部会

部会長 栗山正也 (KDアトリエ)

今回はありません

## □日本インテリア近代史研究G

湯本長伯 (日本大学)

前号において報告したように、様々な資料を集めているが、まずはそこからデータベースを作成して、資料の一覧性を持つ集積を作って研究のベースを作ることが、

研究作業の第一歩であった。既にA1版の年表形式（電子的検索が可能）で16枚を超える年代的事項が収納されているが、その資料を読み込んだ研究成果として、幾つかの途中成果を別稿（次頁以降）で報告する（日本インテリア近代史における産業工芸試験所・商工省工芸指導所・百貨店の役割）。従来、資料を集めることに主眼が置かれた面もあったが、集めた資料を十分に読み込むことが重要であろう。読み方、解釈はそれぞれ異なって良く、結果を押し付ける意図はないが、解釈を深めて行くことが今後は重要ではないかと思考する次第である。

今後は、一旦これらをベースに研究懇談会を行い、色々のご意見を戴いた後に、さらにヒアリングや研究資料共有を深めて行きたい。また産業工芸試験所等では先行研究もある（例えば日本大学工学部建築学科・若井正一研究室、日本工芸財団・岩井一幸理事長）ので、研究情報共有もさらに進めて行きたい。

## ■事務局より

文責 白石光昭（千葉工業大学）

会員の皆様に満足のいくような対応ができていないか心配ですが、何とか今年も無事に年度末を迎えようとしております。今回は年度末に向けてお願いと確認をさせていただきますので、よろしくお願いたします。

### 1) 年会費の件

今年度の会費をお支払いいただいていない方がおられます。お手数ですが、まだの方は至急振込をお願いいたします。また、振込用紙をなくしてしまわれた方は、事務局にメールにてご連絡ください。

### 2) 準会員の正会員への変更（または退会）の件

本学会では、大学院生は準会員として大会発表等ができる会員として、ご活躍頂いておりますが、大学修了後に就職等で移動された場合、上記の確認等にかかなりの時間を費やしております。年度末を迎えますので、準会員の継続、退会等について指導教員の皆様からご指導を頂けると大変助かります。

### 3) 論文投稿と大会発表の資格の件

今年も皆様のご協力のもと論文報告集、AIDIAジャーナルの発行、大会関連では大会梗概集を発行いたしました。

ただ、ここ2-3年発表者の会員か否かの確認が大変増えてきております。論文及び梗概集の発表者は正会員、または準会員であることとなっておりますので、発

表する際には、確認を行ってからのご投稿をお願いいたします（なお、賛助会員の発表・投稿は不可となっております）。

## ■連載『インテリアの行方』 —超えていくインテリア—

ペリー史子（大阪産業大学）

以前に、留学中に建築雑誌のページをばらばらと見ていて、ハッと気に留めた一枚の写真がある。

それはどこだったのか、記憶が定かでないが（多分アメリカのどこかの大学のホールだったような）、透明なガラス壁の向こう一面に緑したたる林が広がり、ガラス壁の前の小さなステージに1台のグランドピアノが置かれている風景である。写真なのに、柔らかい音が聴こえてくるような気がし、しばらくすると雨の日には……と別の風景が浮かび、そこからまた新たな光景が浮かんできては別の音が聴こえてくる、そんな気にさせられたのである。

このホールのワンシーンはずっと心に残り、コンサートに行く度に、ミュージックホールはどうしていつも不透明な壁に囲まれているのだろうかと考えていた。

そして数年前に、大阪のフェニックスホールに行った時、アンコールの最後に、この件に関してびっくりすることが起こった。楽団がバックにしていた壁、とっていた部分が、実はブラインドのようなものであり、ざわざわと音がしてそのブラインドがあがっていたのである。一面に大阪の夜景が広がり、このホールがとても魅力的に見えてきた。文字通りにキラキラ輝く夜景を背景に、いろいろな想いをのせた音が流れていくことがとてもすばらしかった。

のっぺりとした不透明な壁がなくなり、向こうの風景が見えてきた瞬間にこの室内は変容したのである。

当たり前ではあるが、室内と外とのつながりの有無を決めるのは壁の作り方であり、窓やドアのデザインに関わってくる。そして、外と関わるとは、つながりをつくるだけでなく、外とのつながりを断つという事も当然あり、これらから、インテリア空間同士も含めて内と外の多様な関係が生まれ、全体へと展開していく。

そこで、インテリア空間を構成している様々な要素と人の感覚に訴えてくることとのつながりを何か言葉で表現してみようと思い、書いてみたのが次のようなリストである。

- ・語りかける壁
- ・期待させる窓
- ・つながるドア



- ・気づかせる天井
- ・受け止める床
- ・訴えてくるヴォリューム
- ・〇〇〇家具
- ・〇〇〇明かり

もっと別の言葉もでてくるだろうし、もっとふさわしい言葉があるかもしれない。こんな風に言葉探しをしていくと、普段は無意識の内に壁を描き、窓を設け天井をデザインしている、その同じ内容が、もっと楽しくなり、イメージが次へとつながり、部分から全体へと、物語と共に流れていくことによって、回遊性も生まれてくるのではないかと考えている。

その空間にいる人のポエムと一体化していくインテリアデザインに、もっともっと多く出現してきてほしい、と、こんな想いを込めて、インテリアに関わってきてきる。

そして、このようにして創られたインテリア空間に、寒い冬には暖かく、暑い夏には涼しげな空気が流れていると、心から五感が気持ちよいのではないかと思う。

## ■各地・各氏から

### □日本インテリアの先兵だった高島屋百貨店インテリアデザイン史料を移管して

— (第2稿) —

舘野羊一 (舘野創作研究室)

日本インテリア学会関西支部会員

関西インテリアプランナー協会会員

元・㈱高島屋 関西設計室

### 第3話 一部門のインテリア史料について—

百貨店のインテリア事業部門では、無数の設計図書や写真も保管されているが、公表出来ない。設計図書は、最終ご依頼主・お施主様にお渡しし、原則、あちら様保管である。

宮内庁、国官公庁の実績については、秘守義務があり、内装を担当した具体的物件名の公表も許可を頂く。昭和の改修の迎賓館赤坂離宮や新築の京都迎賓館を受注したことは述べても、閲覧、公開出来る史料は高島屋アーカイブスには少ない。有るのは、『高島屋150年史』や『インテリア事業100周年史年表』と、『装飾部営業カタログ・4—5年おきの歴代完成作品集』での物件名と、許可された写真のみである。また、今秋に出版される、(仮称)『高島屋装飾事業135年史』を、史料館でいざれご覧いただける。百貨店が日本のインテリア近代史で果たした役割を読み取っていただけるはずである。

### 第4話 一装飾係り創設のころ—

1878年・明治11年・敷物緞通製作したこの年を、室内装備・装飾事業を担当する部門『装飾係り』の誕生の年としている。

高島屋の創業はこれより遡る47年前である。1831年・天保2年・呉服商として、京都烏丸で創業した。呉服、織物、染め物など都・京都の文化・工芸を中心に、お客様のすべての要望に敏感にお答えする社風を、呉服商経営から得る。1855年・安政2年・はペリー再来航の翌年だが、外国人の来店が増え、高島屋は緞通、外人向け美術染織品を制作し販売し、このあと貿易業も始める。

明治11年にもなると西洋文化の取り入れは、建築の世界では盛んになり、公式の迎賓の場はもちろん、個人邸宅などでも、空間設定、家具・備品の調達、装飾性の実現など、百貨店にご用命が増えてきた。高島屋が室内装飾事業を敷物・飾り織物から、始めたころ、建築の西洋化はすでに始まっていた。竹中工務店は、竹中藤兵衛正高が名古屋で、1610年に竹中組を創業した。1804年・文化元年・に清水喜助が東京神田で清水組を、1840年・天保11年・鹿島岩吉が江戸・四谷で鹿島組を、1892年・明治25年、大林芳五郎が大阪靱南通りで大林店を創業している。竹中工務店は、1899年・明治32年、ヨーロッパ型の建築技術を導入し、神戸港開港で神戸に移り創業1年目としている。

明治政府による近代化は、一説に2600人を超えるといわれる『明治のお雇い外国人』の招聘によってなされたという。法律・医学・軍事・造船・鉄道・河川改修・農業・貨幣・教育などの多分野にわたるが、革命的であり、近代化のためとはいえ、広く国民の我慢に基づくものである。

『建築』という言葉は『建』てる、組むと、『築』く・基礎・という言葉から、明治初期の造語と聞く。この明治の招聘建築関係者だけでも、アンダーソン、カペレットィからはじまり、ヘルマン・エンデ(独)、ヴィルヘルム・ボェックマン(独)、トーマス・ウォートルス(英)、フランク・ロイド・ライト(米)、そしてジョサイヤ・コンドル(英)・1852年—1920年日本で没・などである。

コンドルは、西南戦争が間もなく勃発するという慌ただしい明治10年・1877年に英国から横浜に着いた。内閣工部省技術官に着任すると工部大学校(現・東京大学)の、当時世間ではあまり注目されていない『造家学科』の外国人教師に着任する。第1期卒業生が、辰野金吾・片山東熊・曾禰達藏・佐立七次郎らである。

教育機関も創立が続き、東京帝国大学・明治11年、東京美術学校・明治20年、京都帝国大学・明治30年、京都高等工芸学校・明治35年創立と続く。

『造家学科』の卒業生は、これ以後、渡辺譲、久留正道、河合浩蔵と続き、明治19年卒の田中豊輔・大成建設・等を輩出した。コンドルの下で働いた桜井小太郎は、他の卒業生同様海外留学し、ロンドン大学に学ぶ。東京丸ビルの設計が有名だが、イギリス風中小建築が得意であったという。高島屋装飾係りは、曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所とお付き合いがあったが、その他の交流は史料では見つからない。

このようにコンドルの流れだけを見ても、明治以後の多くの日本の西洋建築の先駆者たちを生む。また別の流れでは、町々の大工さんが独自に学び、横浜・神戸はもとより、疑似西洋建築様式といわれる西洋風インテリアが各地に出来る。

高島屋装飾係りはこのような建築環境のなか、明治18年に大阪府庁の窓掛装飾品一式を受注する。明治20年宮城造営に当たり装飾織物を納入する。また明治23年には帝国国会議事堂の、玉座、大臣室、貴賓室、議場の装飾物を受注する。さらにのちに得意とするホテルインテリアの始まりとして、帝国ホテル、奈良ホテルの家具・装飾工事を担当する。明治30年、宮内庁御用達に指定され、天皇旗・皇后旗のご謹製をする。明治32年には御料車の内部装飾を受ける。同じ年に船舶の内装工事を初めて、山陽鉄道（国鉄の前身）の連絡船『豊浦丸』『馬関丸』の船内工事で始める。

これらは自らの設計によるものか、先述の建築先駆者によるものかは史料が無く不明であるが、建築のインテリア、車輛のインテリア、そして船舶内装の始まりもこの頃である。

## 第5話 一設計部常用日記から一その1

史料群の中に、昭和4年から昭和13年までの大阪設計部の常用日記・業務記録・があった。なぜか9年の日記帳は無い。現在閲覧出来ないので、一部をお話する。各年の日記の設計業務物件を見ていると、平和裏に推移しているように勘違いする。日記帳付録の末尾の日本の地図は広く大陸も入っていて、日本一の山は『新高山』である。昭和13年の常用日記の表紙は『皇紀2598年』とある。

数多くの邸宅・各地県庁・ホテル・客船の設計をしつつ、兎に角良く働いた大阪設計部は7名から15名と設計者が増えている。

その昭和4年の日記に『ペル複写』という業務が何度か日記記載されている。並行して当時内装受注した『龍田丸』の名前がある。この『ペル』複写とは、造船所が海外設計社の指示を受けたインテリアデザインパースを設計と条件として、内装業者に複写させたか、あるいは自ら学ぶために写したと見る。

この頃、陸上の邸宅でも海外の設計者のパースによ

り、設計外注があった。……が、明治のパース史料はあまり存在しない。ただ東京麻布鳥居坂の岩崎小彌太郎の洋館・中村順平設計・の室内透視図が、1枚あるが作画者は不明である。

先に述べた設計部員・鈴木三一氏・のちの設計部長・は日中戦争が起こる1か月前の昭和12年3月から社命で、半年間派遣され、イギリス、フランス、欧州を視察し、さらに北米各地を回り、建築・家具様式と豪華客船を視察した。パリでは高島屋出品の万国博覧会にも参加し、12年9月に帰国している。鈴木氏はスケッチが的確で、早く上手く、この視察出張中に作成された様式建築や様式家具の絵を数多く残している。我々の教科書となった『建築様式一覧表』2枚と、『Table of Styles・French furniture in history』と『Table of Styles・English furniture in history』は手書きの家具様式の一覧表である。

設計部の世話人一同で、この数多くのスケッチ、詳細図をまとめて、4冊出版され、高島屋史料館にもいづれ置かれる。この本は学ばれた手元記録である。鈴木氏がなされたように、手書きして様式詳細を描かないと、感覚的にも身につかない。高島屋設計部には描ける先輩が実に多い。永山美樹初代設計部長から、この鈴木三一・樋口 治・森岡 正は大阪の先輩。東京では喜多村政良・宇佐美滝三郎・渋谷 貞・菊池敏之・古藤司郎・森川正造ら各氏である。この鈴木氏の手書きの4冊の『World Furniture』を見るたびに、私たち後輩を『理屈を言うな、描かんか。』と叱っているようである。特に東京の菊池敏之氏はさらに多くの国のインテリア家具様式図をまとめられ、かつ1/5の様式椅子模型を100脚まで作ると、ご健在である。

## □日本インテリア近代史に関する調査研究

### 一（1）商工省工芸指導所の役割に関する研究一

渡邊裕貴 高野祥太（日本大学湯本長伯研究室）

#### 1. はじめに

日本には古くから金工・木工・漆工といった工芸品が多く存在する。明治6年（1873）に開催されたウィーン万博に日本の伝統工芸品が出品され、日本は「美術工芸の国、日本」という国際的な評価を受けた。明治の近代化にともない美術工芸品の輸出が主要になったが、その当時の製品は、欧米人の趣味に合わせただけで、機能性に欠けたデザインの製品が多かった。そのため継続的な輸出には至らず、昭和初期には輸出政策の衰退が顕著になった。輸出による外貨の獲得と、日本工芸の近代化、東北の産業を開発するために商工省工芸指導所が開設さ

れた。本稿では商工省工芸指導所が、日本のインテリア分野の立ち上げ期に社会に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究手法

本稿では、工芸指導所の変遷を第1期「創設以後の体制整備」、第2期「規範原型という研究の基本方針の確立」、第3期「組織の拡大と第2次大戦」第4期「戦後の復帰」と区分する。収集した資料とそれをまとめた年表、これまでに発表されている論文から日本のインテリア近代史と工芸指導所の関連を調査し分析、考察を行う。

## 3. 結果・考察

**第1期（1928～1932）**昭和3年（1928）に商工省工芸指導所が仙台に設置された。日本で唯一の国立の工芸デザイン指導機関であり、工芸品の品質や意匠性を高めるとともに、工業化を進めて工費を抑え、輸出用の工芸品を量産的に生産する体制を整備し、金工・木工・漆工などのデザイン研究や技術開発が行われた。昭和7年（1932）に漆工の可能性を広げ、海外の嗜好に合うようなデザイン、色、質感を求めて新たに「玉虫塗」（図. 1）という漆塗装が発明された。玉虫塗は昭和60年（1985）に宮城県の伝統的工芸品の指定を受け、仙台の特産品として親しまれている。商工省工芸指導所は創設以後、新たな日本の工芸品の維持・発展を行う施設としての体制整備していったのだと考えられる。

**第2期（1933～1940）**昭和8年（1933）に開催された工芸指導所研究試作品展覧会にドイツの建築家であるブルーノ・タウトが訪れた。彼は作品に対し「間に合わせのやつつけ仕事」「欧米の模倣」「輸出趣味」と批評したことがきっかけとなり、工芸指導所に顧問として招かれた。ブルーノ・タウトは「工業生産のための規範原型」（図. 3）を提案し、使用目的と機能から製品の本質的な機能形態を探ることが大切であると指導し、工業生産と製品デザインはこの規範原型の手順で製造・考案されるべきであると主張した。「工業生産のための規範原型」は椅子や机など12の分野が対象になっており、ブルーノ・タウトが在任していた期間には椅子、電気照明器、ドアハンドル、小工芸品の4分野が手がけられた。工芸指導所ではブルーノ・タウトが離任してからも剣持勇、豊口克平らによって規範原型の研究がまとめられた。「工業のための規範原型」は工業生産と製品のデザインの考えや方法が明確になっており、日本の工業生産の近代化に繋がったと考えられる。

ブルーノ・タウトにゆかりのある人物として剣持勇、豊口克平、渡辺力などが挙げられる。（図. 2）剣持勇はタウト研究室専従助手として活躍した。近代インテリアデザイナーの先駆者であり、工芸指導所には1932～1955年までの23年間在籍した。豊口克平は日本を代表する工業デザイナーである。型而工房に所属した後、1933

年に工芸指導所に入所し家具の標準化を研究した。剣持勇と同様、タウトの助手として活躍した。渡辺力は群馬県工芸所にて指導していたブルーノ・タウトに影響を受け、ジャパニーズデザインの研究を行い、日本を代表するデザイナーとなった。

**第3期（1941～1945）**商工省が廃止され農商省に替わり航空機の木製部品の設計製作が始まった。戦時下のため「奢侈品等製造販売制限規則（七・七禁令）」によりアクセサリなどの工芸品の生産が制限され、生活用品の合理化が進められた。そのためデザインは単純になっていったが、工芸指導所ではこの単純なデザインの中に「新しい美」を求めるようになっていった。戦時統制により生活日用品が単純規格化されたことは、戦時下における国民生活レベルの底上げを図ったのだと考えられる。昭和16年（1941）工芸指導所は国民生活用品展覧会を開催した。この展覧会では「生活用品工業に対する指標」が掲げられ、戦時中の生活用品の国民的標準を示すことを目的としていたが、敗戦によりこの目標は実現することはできなかった。

**第4期（1946～1951）**昭和21年（1946）工芸指導所では進駐軍家族用の家具（DH家具）の設計と生産指導が始まった。敗戦により材料や人材が不足している環境での復興は容易ではなく、軍需産業から平時産業へと変化したGHQから要求される条件は非常に厳しいものであった。しかしアメリカ人の思考や文化を経験することにより、工芸指導所発足からの洋式化への技能が育まれた。当時の研究開発は現在の家具づくりの規範になっている。

## 【参考文献】

- 「産業工芸試験所におけるデザインと人間工学－1・2・3－」, 財団法人工芸財団
- 「仙台デザイン史博物館」, 東北工業大学デザイン工学科, 庄子晃子研究室
- 庄子晃子, 「ブルーノ・タウトの工芸活動（3）－工業生産のための規範原型論－」, デザイン学研究No. 52, 1985
- 庄子晃子, 「ブルーノ・タウトの工芸活動（4）－工業生産のための規範原型論の実践－」, デザイン学研究No. 55, 1986



図. 1 玉虫塗

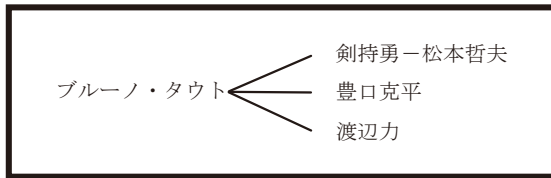


図. 2 ブルーノ・タウトの影響

- [規範原型の制作手順]
- 1) 調査研究（優良品の収集、資料収集基礎考察）
  - 2) 設計・デザイン（設計図批判会の繰り返し）
  - 3) 工作（モデル批判会の繰り返し）
  - 4) 最後の批判と社会的批判（規範原型としての最終判断）
  - 5) 完成、そして宣伝

図. 3 ブルーノ・タウト「工業生産のための規範原型」

【参考文献】（続き）

赤松幹之, 吉岡松太郎, 「工芸指導所から産総研に至る産業技術としての人間工学的研究のあゆみ」, 2009  
 堀田明裕, 「人間要因から見たデザイン研究の方向」, 財団法人工芸団体

一（2）産工試の役割に関する研究一

高野祥太 渡邊裕貴（日本大学湯本研究室）

1. はじめに

戦後日本が海外からの文化を取り入れて近代化が始まった。床座と椅子座の文化が混在し、新たな日本の生活空間が生まれた。戦後日本の住様式に、西洋の文化が上手く混在できるよう、産業工芸試験所が研究を行った。

2. 研究手法

収集した資料を整理しデータベース化し、インテリアエレメントの歴史、作品・人物をいれて年表をつくる。工芸ニュースなどの資料から産業工芸試験所の研究をインテリア史の観点から紐解いて行き、研究の補足として剣持デザイン事務所の松本哲夫氏への聞き取り調査をする。

3. 結果・考察

産業工芸試験所の業務内容は意匠、技術、包装及び調査指導の4つの部署に分けられている。その中からインテリア史に大きく関わる研究をここにまとめる。

（意匠）はじめに産業工芸試験所は、戦後海外で日本の漆工は伝統工芸として、その美しさと強靭さが海外で高く評価されたことから、海外に産出する事を考え、漆の研究を開始した。その結果非円形のろくろを作ること成功し、漆工の技術が向上した。昭和31年、デザインは一般の人たちにも関心が高まるようになったため、集団及び個人生活における色彩効果を、人間工学的観点から研究をおこなった。また、昭和32年、日本の室内意匠に海外の文化である椅子を、どう組み込んでいくかの研

究をした。その過程で椅子に対する知識またデザインを学ぶために、産業工芸試験所は昭和31年から、アメリカに倣って「デザイン講習会」を開催した。特に第4回目の講師をつとめたジェイ・ダブリン、デーブ・チャップマンによる講習では、はじめて見るデザイン用具、パステルや色鉛筆でのスケッチの技法は、日本のデザイン現場に手掛かりを与えてくれるものとなった。彼らの講習会は日本のデザイナーに大きな影響を与えたのがきっかけで、昭和34年に工芸材料のデザインを人間工学的観点から人にわかりやすい色彩、文字の大きさ、太さを研究していった。また、昭和34年デザインに使われている材料の表面に着目を置いて、光沢や粗さといった素材そのものが持つ感覚を研究した。

産業工芸試験所は、日本の文化を大切にしていた。またその伝統工芸を壊さないよう海外の文化を取り入れるため、日々研究をしていった。

（技術）昭和29年には今後の日本の経済において輸出はなくてはならないビジネスだと思い、輸出するにあたって、雑貨の品質が重要になってくると判断した。産業工芸試験所は雑貨を分析し、優劣や改善点を明らかにしていった。また、同じ年に写真の研究をしていて、インテリアを作っていく過程において写真は文章では伝わらない部分を教えてくれるため、インテリアにはなくてはならないものと判断した、産業工芸試験所は写真的視野と人間が直接見ている風景では表現できる色彩の種類が少ないことに着目し、より写真の性能を上げる研究を行なった。昭和34年にデザインの基本から至る縦貫的デザインを習得する目的で海外のデザイナーに指導を依頼した。彼らは産業工芸試験所が向わねばならない方向性を芸術の方向ではなく科学のものへと推し進めた。昭和28年、工芸試験所は日本近代調の研究。日本のデザインが海外に信用されていなく海外市場に一流として扱われないため、日本の伝統的技術および独自性と近代美と品質を近代商品として海外にアピールし、日本の悪いイメージの脱却をはかった。

これからの日本の経済をデザインの方向性から考えていった産業工芸試験所はデザインがこれから海外に通用するようにデザインの技術を伸ばしていった。

（包装）昭和31年、日本の伝統工芸を海外また国内に輸送するにあたって品質を輸送中に下げないようにするため包装物の衝撃及び揺衝材に関する研究を行った。

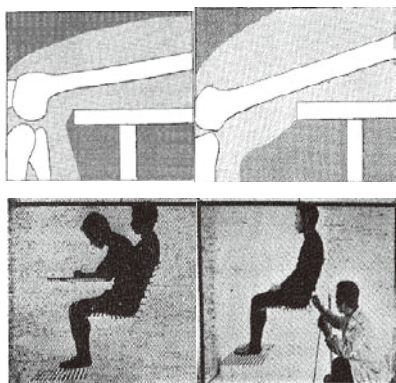
戦後の日本は輸出に関しての知識が全くの手つかずであった。そのため、この研究によって輸出に関する問題をかなり解消することが出来た。

（調査指導）昭和28年、日本の物に対する規格が変わったため日用器具用具の機能を調査し、人間工学的観点から基本形態の規範を探求する研究を行った。

昭和30年産業工芸試験所は椅子を人間工学的に作る研

究を行なった。まず椅子をデザインする過程で大切なことは時折姿勢を崩し楽な体制を作っておくことである。産工試はX線写真を元に骨の位置などを調べて、大枠をつかんだそして被験者を使い座面や背凭れを人の骨、筋肉、血流などから日本の椅子を作り出していった。昭和31年内外工芸事情および工芸意匠の調査もしている。この調査から産業工芸試験所や他の工芸研究を行っている企業の研究内容を工芸ニュースという資料にまとめた。昭和35年デザインに関連する生活用品か一般性の高い掃除用具の詳細を人間工学的観点から分析し、今後の資料として使うできるようにまとめていった。

まとめ、今私たちが生きてい中で使われているデザインと私たちが使っている日用品などの快適性の根本は、産業工芸試験所が行った研究によってつくられていた。私たちは当たり前のように使われているインテリアを作ってくれた産業工芸試験所に敬意を払うべきである。



椅子に関する人間工学的図または写真

#### 4. 今後の展開

さらに文献を増やし、データベースを充実させて、考察を深める。

##### 【参考文献】

- インテリア産業の現状 —インテリア産業振興対策委員会中間報告書—
- デザイン・日本の家具1945/1968
- 家具の年表 —椅子—
- 工芸ニュース 等
- 各関係者からの聞き取り調査資料

#### —(その1)百貨店三越の歴史的役割について—

小林寛大 白川敬晃 (日本大学湯本研究室)

##### 1. はじめに

明治政府は日本の近代化を洋風化と捉え、生活環境に大きな変化をもたらした。和と洋が混在する日本独自の生活空間が生まれる中で百貨店は、設計部を設置して欧米・西欧の家具デザインを学ぶ中で日本インテリアを近代化、またインテリアの概念を世に定着させるために奔

走っていた。本研究では、百貨店三越がインテリア近代史において国内外の社会や建築界に与えた影響を明らかにすることを目的とする。

##### 2. 研究手法

収集した文献とそれらをまとめ制作した年表(表1)を中心に、日本の近代インテリアの変遷と百貨店三越の関連を読み取る。そこで三越が担ってきた歴史的役割について、明治期から昭和期の歴史とも照らし合わせながら考察していく。

##### 3. 結果・考察

###### 1) 明治期

1673年(延宝元年)越後屋呉服店として開業した三越は、明治37年に株式会社三越呉服屋として日本初の百貨店になるとともに、生活西洋化の先陣を切る存在でもあった。そこで洋家具売場創設を考え、伝統技術に携わる若い社員が研究生として英国・米国の百貨店へ室内装飾を学ぶために派遣された。その中で、海外派遣経験者である林幸平らが明治39~40年に既存建物を利用した「パリ日本大使館の内装・家具設計」という国家的事業の成功が、江戸時代の呉服屋から多才な百貨店へ変化したことを周囲に印象づけた。その後、丸の内に初の自社工場を建て、高級家具の製作を開始した。明治期の三越は、主に海外での技術習得および人材育成を行い、大使館内装設計という未知の分野に挑戦しながらも自社での家具の設計・製作ができる体制を整えていったと考えられる。

###### 2) 大正期から第二次世界大戦後

大正3年に日本橋三越本店が落成し、「家具装飾部」としてインテリア部門が独立した。同年に東京大正博覧会へ家具出品して生活水準のやや高い新家庭を演出し、近代的で幸福な住まい方を提案している。そこから大正7年に「オリジナル食堂セット」を見込生産し、いす座の環境づくりが近代化へつながることを大衆に告げた。一方で欧米・欧州研修で学んだ成果を大正14年の「台所設計展」や昭和3年からの「新設計家具展」で発揮した。これらの展示会は、新たな生活の知識・技術による消費生活の向上と女性主導の合理的家庭生活を提唱した生活改良運動が盛んな中で大衆の注目を浴び、生活価値観の転換に大いに役立った。そのため大正13年に落成した富士屋家具製作所では、洋家具のデザイン・制作が盛んに行われた。昭和2年には家具装飾部に「外商係」を設けて、特殊な顧客のみの受身営業から脱し、建築業界の情報を取り入れて広く営業展開した。そこから国会議事堂等の近代国家の象徴となる建築物に携わるようになる。また昭和12年に城所左文次設計の「バンブーチェア」が国内外で高い評価を受け、昭和19年の株式会社三越製作所の設立で、より展開の幅を広げた。この時代の三越の動きは、日本の近代文化の創造に影響を与えている。

表1 近代日本における三越のあゆみ

年度	1673	1895	1896	1904	1905	1906	1907	1910	1911	1912	1914	1918	1920	1923	1924	1925	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1935	1937	1939	1944	1948	1949	1953	1960	1961	1965	1967	1968	1969	1973	1975	1976	1977	1984	1985	1989	
	(鑑室)	28	29	37	38	39	40	43	44	(大正)	3	7	9	12	13	14	(昭和)	2	3	4	5	6	7	10	12	14	19	23	24	28	35	36	40	42	43	44	48	50	51	52	59	60	64
三越	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業	越後屋呉服店を江戸本町で開業

3) 第二次世界大戦後から昭和後期

三越は昭和23年に戦後初の「新設計洋家具展」を開催した。これは昭和22年に産業工芸試験所の量産家具研究開始や新たな材料・技術等の影響を受けている。昭和30年以降には生活美点の観点から、成型合板の可能性の追求や学生作品を登用するなどして新しい感覚を求めた。この家具展は昭和40年で終了したが剣持勇氏や渡辺力氏、ジョージ・ネルソン氏らが来場して好評を博した。しかしその中で、経済成長から仕事が急増し、組織デザインの質の維持とオリジナリティの創造が問題となった。そこで昭和42年に「三越標準家具」が提案された。結果、標準の型に各デザイナーのデザインを取り込むことでデザインの質の安定とプロセスの合理化が図られた。また各団体との協同設計や設計コンペティションに参加した時代でもあり、その中でも「日本航空さくらラウンジの内装設計コンペティション」は、若い社員の案を採用して入選し、組織として経験を積んだ。また昭和51年に丹下健三都市建築設計研究所とのプロジェクトに対応すべく、テヘランへ海外展開をした。そして昭和52年に「家具装飾部」から「建装部」に名称を変え、昭和60年には「開発部」を設けて内装や家具の設計施工前のソフト部分の提案ができる体制を整えている。

【参考文献】

『日本インテリア学会会報54号』、日本インテリア学会、2014。  
 大森克夫 『150年の歩みを綴るインテリアファブリックス業界変遷史』、TDA、2012。  
 尾川正昭 『インテリアへの取り組みとその展望(そのIV) -百貨店インテリア設計部の場合-』、三越、1998。  
 安田政彦 「絵巻書にみる大正時代の博覧会」、帝塚山学院大学、2007。  
 所莊吉 『壁紙百年史』、壁装材料協会、1982。  
 『インテリア産業の現状—インテリア産業振興対策委員会中間報告書—』、通商産業省生活産業局総務課・住宅産業課、1974。  
 『家具の年表(その1) 椅子』『建築工法、各部寸法の変遷』  
 『年表・商環境の歩み』『デザイン・日本の家具1945/1968』

【注釈】

注) 制作した日本インテリア近代史年表「百貨店 三越」の項目より抜粋

—(その2) 百貨店高島屋の歴史的役割について—

白川敬晃 小林寛大 (日本大学湯本研究室)

1. はじめに

(その1) で述べられた百貨店の役割について(その2) では百貨店「高島屋」がインテリア近代史においてどのように影響され、影響を与えたか、日本の歴史的事実からの関連性について明らかにする。

2. 研究手法

(その1) で述べられた近代インテリア史の年表とともに、百貨店「高島屋」との関係性を考察する。そのなかで明治・大正・昭和期の時代区分に分けて考察していく。

3. 結論

高島屋の始まりは、初代飯田新七が1831年に京都で古着・木綿を扱うお店を始めたことである。その後、明治期、大正期、昭和期に分類して、歴史の流れと共に、百貨店の役割について考察する。

1) 明治期

明治初期、文明開化により多くの外国人が日本に足を運ぶようになった。1877年、京都博覧会に積極的に美術染織品を出品し、博覧会で数々の賞を受賞した。これにより世界から注目を集め、また国内でも宮公庁、公共施設、ホテル、船舶の内装・家具工事等多くの受注を得ることになり、宮内省御用達の栄誉も受ける。百貨店が船舶の内装事業を受注することはめずらしいことであり、大正期以降、船舶内装事業は著しく発展する。呉服店として国内外に出品した豪華な刺繍を施した着物は日本の下絵を描く美術家、卓越した技術をもつ染織物との間に親密な関係を築いた。この染織物の技術は高島屋の柱の一つになったと考えられる。また、1889年に東京歌舞伎座や1890年に京都・祇園館の引き幕を調製したのをはじめ、様々な劇場引き幕を手がけた。1896年には京都南店に座売り販売から陳列販売方式に変更し、今の百貨店の原型ともいえるショウウィンドーを設置した。1909年には大阪北浜に落成した帝国座の緞帳を都路華香(つじかこう)原画の「天の岩戸開き」を染め上げたビロード友禅で調製した。翌年には東京・帝国劇場を手がけるな

ど、その後多くの緞帳を調製した。さらに同年、当時の有名画家による「現代名家百幅画会」を開催した。民間で最初といわれるこの大規模な展覧会を機に、高島屋美術部は創設された。そしてその後も美術作品の収集・販売を行い、多くの作家との関係を築いた。

このように明治期は呉服屋の布地という素材から事業領域が広がり、高島屋の幅広い事業と海外への事業開発から、染織物の力量は日本を代表する技術の高さを持っていたものと思われる。

## 2) 大正期

大正期になると、政治・社会・文化の各方面における民主主義、自由主義的な運動が起こる。この文化方面である美術団体の文部省支配からの独立を訴えた運動の影響により、1919年大阪で、鉄筋コンクリートの近代店舗を建築し、積極的に百貨店経営に取り組み始めたと考えられる。また、国内の奈良県庁や日本生命の室内装飾を中心に、NYK箱根丸・榛名丸・管崎丸の船舶内装工事や家具装飾陳列会に出品するなど、百貨店経営と並行して行われた。大正末期の1923年には関東大震災により東京の南伝馬町店が全焼したが、一ヵ月後に臨時営業所を開設した。そして復興バラック建材を発案し、納入するなど復興支援を行っていたと考えられる。

大正期は国内の政治面や文化面の著しい変化を求める動きの中で、高島屋は百貨店の本格的な経営と国内での事業の役割を固めていったと考えられる。

## 3) 昭和期

昭和期になると、日本は太平洋戦争へ向かっていく。大正末期に起きた関東大震災からの復興景気は沈静化し、各百貨店とも販促に苦慮していた。そうした中で高島屋は10銭均一売場が好評を得た。そして1933年に鉄筋コンクリート造り、地下2階、地上8階の東京日本橋店が完成。同年3月開店した。1階ホールは柱はイタリアから取り寄せた大理石張りで、天井には豪華なシャンデリアを3本吊るし、当時三井本館とともに贅を尽くした2大建築物と言われた。そして1938年に呉服店としては異例の食堂経営に取り組み、大阪店に東洋一の大食堂が誕生した。その後太平洋戦争で東京・大阪は相次いで空襲に見舞われた。しかし両店とも本館の全焼は阻止し、終戦後は戦後復興を遂げ、高島屋では屋上に象を招き、一大センセーショナルを巻き起こした。さらに1956年には戦後日本で初めての外国催であるイタリアンフェアを各店で開催し、海外に目を向けた動きがみられる。そして1970年には日本万国博覧会の「みどり館」と「日本民藝館」の両館に共同出展で参加した。迎賓館、政府館をはじめ、各国パビリオンの内装にも携わった。

昭和期は戦争という激動の時代の中で百貨店の地位を確立し、終戦後は日本の復興の中で、集客のためのアイデアを模索しながら、国内に大きな影響を与えた。



高島屋 船舶内装スケッチ (館野氏資料より)

## 【参考文献】

- 『インテリア産業の現状』、通商産業省生活産業局総務課・住宅産業課、1974.  
『家具の年表(その1) 椅子』『建築工法、各部寸法の変遷』高島屋HP参照  
『デザイン・日本の家具1945/1968』  
『日本インテリア学会会報54号』、日本インテリア学会、2014.  
『年表・商環境の歩み』  
所荘吉 『壁紙百年史』、壁装材料協会、1982.  
毎日新聞HP  
<http://sp.mainichi.jp/feature/news/20130917ddf010040009000c.html>

## □小原二郎研究室の想い出

桑原道雄 (本会会員)

今年東京オリンピックの開催、そして新幹線の開業から50年の説目の年にあたります。東海道新幹線もこの東京オリンピックに合わせて開業したのです。日本は高度経済成長を向えてまっしぐらでした。

当時わたしは静岡大学の学生でした。翌年卒業すると、直ちに4月から千葉大学工学部(前身は東京高等工芸)の工業意匠学科へ学士入学しました。工学部は松戸(陸軍の工兵学校跡地)からJR総武線の西千葉駅近くの元東大第2工学部の跡地に引越し、他の4学部とも合流したのです。工業意匠学科での指導教官は山崎幸雄先生でした。小原二郎先生は建築学科の教授ですが、カリキュラムは自由に選択でき、キャンパス内にある東大生産技術部の池辺陽先生の授業も受講出来て、インテリアを指向する者にとって都合が良かった。

静岡大学には千葉大学工学部の前身である東京高等工芸の出身者が2人いて、1人は金属工芸1人は木材工芸でインテリアをやるなら、千葉大進学を熱心に勧められたのでした。

静岡大学での卒業研究は「児童の学習家具の人間工学的研究」でした。戦後のベビーブームで生まれ、今という団塊の世代の子ども達でした。食糧事情もよくなり、成長

の早い時代でした。学歴社会の到来で、たいていの家庭では子ども部屋を造り、子どもの学習環境に拍車をかけていた。そのための家庭における学習家具の提案でした。

わたしは小学校の学校家具のJIS規格に注目し、小学校の机やイスのサイズが家庭においても適切に使われるべきと考え、当時の文部省のJIS規格が工学部の小原二郎先生が関係しているらしいことに気がついて、はるばる松戸にある工学部へ行くことになったのです。あわせて、短期大学の木材工学科の狩野雄一先生のご指導もあって、東京での市場調査もした。小原二郎研究室の大内一雄先生には卒業研究の為に人間工学に関する資料をいただいたり親切なご指導もいただいた。

わたしが学習家具にこだわった理由には、実は生まれ育った静岡の実家が木材加工・和洋家具の製造を生業として来た家柄であった。出来たばかりの中学の机やイスも製作したこともある。又、おそまつな現場体験であるが、若い女教師がお産の為に休職し産休補助教諭を1ケ年間勤めたことがあるからだろうか。

昭和40年4月から真新しいキャンパスと真新しい教室でスタートとした。

小原二郎研究室の白い扉には「室内計画室」とだけの小さなシールが貼られていた。

実は小原二郎先生は1年間、文部省によるアメリカイリノイ工科大学へ海外留学中でした。留守をあずかるのは大内一雄、寺門弘道両先生でした。

わたしは松戸校舎時代からのつながりがあって、大内先生のとりなしで在学中研究室にお世話になりました。授業がないときには、与えられたスチールデスクに居る日々でした。研究室にはベット体圧分布、イスの体圧分布の計測装置がありました。しかし、東海道新幹線が使われている車輛シート「リクライナー」のコピーが1台あったのが印象的であった。建築学科の学生で、やがて鹿島や日建設計に就職する4年生などいろいろな人の出入りのある中で、日産自動車の社員が時々みえていた。研究室の雑用などアシスタントの学生2人も忙しくふるまっていた。年末になると研究室の忘年会も忘れられない。

翌年3月帰国される小原先生のお迎えに研究室総出で羽田空港へ出向いたことも思い出の一つである。

今秋、両国の江戸東京博物館で「東京オリンピックと新幹線」というテーマで50年記念特別展があった。

おそらく小原二郎先生の「リクライナー」の設計に関する資料も見られるはずだと予想して行ってみた。やはり、人間工学に基づく設計図が2枚のパネルで展示されておりました。

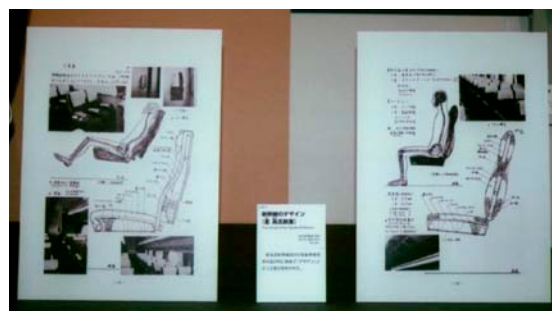


写真-1 会場に展示されていた椅子の人間工学資料

購入した分厚い図録(2,300円)には載っておらず、博物館の学芸員の承諾を得て他日撮影したものです。悪しからず。以上。





## ■ 編集後記

片山勢津子（京都女子大学）

今年度の2号目として、大会報告掲載号をお届けいたします。まず、発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。編集委員の手違いで、執筆者への原稿依頼が徹底していなかったことが原因です。年末年始のお忙しいなか、原稿をお寄せいただきました皆様のおかげでなんとか発行の運びとなりました。お礼申し上げます。

日本インテリア近代史の論文掲載が、前号から始まりましたが如何でしょうか。マンネリ化の懸念のあったこの小誌が、単に記録のためではなく、なかなかお目にかかれない学会員の繋がりのお役に立てればと思います。会報に関してのご意見がございましたら、ぜひ編集委員会までお知らせください。

湯本長伯（日本大学工学部建築学科）

本号は大会後号です。片山先生には、海外から帰国後のお忙しい中を、いつものように誠実に的確に頑張って戴き、深く感謝しております。このような優秀な方を失うのは誠に残念ですが、論文査読も学会を支える重要な仕事であり、近畿は松田先生に頑張ってもらって戴くことになります。何卒宜しく願い申し上げます。このところ重点的に取り上げている「日本インテリア近代史」関連の記

事ですが、皆様のご協力で、かなり充実した資料の収集が出来ているような気がします。桑原会員のような個人の記憶も呼び集めて行ければ、生きた近代史になるようにも思います。館野氏の力作は第2稿で、もう1回で完結します。

10月末に原稿依頼を開始して、1月半ばで漸く発行へと漕ぎ着けました。片山委員の言にも関わらず、小職としてはほぼ通常通りのペースかなと感じます。

引き続き、会報の充実に協力賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

### ■日本インテリア学会会報第55号（2015.1.25発行）

編集者：片山勢津子（レイアウト：広瀬恭子）

発行者：直井英雄（日本インテリア学会長）

広報委員会：湯本長伯、片山勢津子、平田圭子、  
松田奈緒子、丸茂みゆき、若井正一

e-mail: [Jasiseditor@freeml.com](mailto:Jasiseditor@freeml.com)

### ■事務局

日本インテリア学会 事務局 押切泰子

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼2-17-1

千葉工業大学 上野研究室気付

電話：080-2386-5652 FAX：047-478-0552

e-mail: [jimukyoku@jasis-interior.jp](mailto:jimukyoku@jasis-interior.jp)